シャッター以後ー6

「少年の憧れ、或いは空に吸われし夢のゆくえ」

表紙写真●本橋成一
文●村石　保

――少年はパイロットに憧れていた。
ドイツ空軍を相手に大空の英雄になりたかったのだろうか、それとも眼下に広がる地平線の、さらに向こうへの憧れだったのだろうか。
ソ連邦時代のゴメリ空軍基地の払い下げのおんぼろヒコーキを修理してはみたものの、神は空を飛ぶ夢までは彼に与えてはくれなかった。
いつの日からか､誰ともなく彼は「ヒコーキおじさん」と呼ばれるようになった。
――前世紀末の5月、ぼくは初めてヒコーキおじさんに出会った。
つましくはあっても美しく暮らしていた老夫婦の小さな住居隣の格納庫の天井には、飛ぶことのない白い翼が所在なげに吊されていた。
格納庫の大屋根の上には青空が広がり、ヒコーキおじさんの憧れだけをのせた翼が旋回しているようにも見えた。
ふと、場所柄に似合わぬ一首が、5月の大空に浮かんだ。
「不来方（こずかた）のお城の草に寝ころびて空に吸はれし十五の心」
少年啄木もまた、空に吸われていった一人である。
ぼくの友人は、アルベール・ラモリス監督の『赤い風船』（仏/1956）に憧れて、映画監督になった。もしかしたら、彼もまた映画そのものよりも、赤い風船の飛んでいった空への憧れを抱き続けていたのかもしれない。
いつか、本橋成一自身の少年の日の夢のゆくえを聴いてみたいと思っている。

「ヒコーキおじさん」の夢は、きっといまもベラルーシの大空を飛んでいるに違いない。だが、そのゆくえを知るものは、誰もいない……。

第 89 次訪問団報告

施設が整い、スタッフの熱意がたくさんの赤ちゃんを救っている。スベトラーナ副院長からは具体的な臨床事例についての質問が続いた。知識・技術というソフト面での協力へつながっていく。

グランドゼロ 76夏

目　次

ベラルーシ
第 89 次訪問団報告

緊急支援から協力、そして学びあう　6
フェイシェル制度に学ぶ　＜国井真波＞　9
2008 年度スタディツアー　12

イラク支援
バスラ緊急支援

バスラ危機 緊急支援に携わって＜加藤丈典＞　14
アルワリード難民キャンプへ血液分析機支援
＜国井真波＞　18
10 年目のイラクを思う　＜鎌仲ひとみ＞　23

2008 年度理事会・総会報告　29

連載＆お知らせ

ナージャの輪通信　＜武田裕子＞　34
ベラルーシの食卓　38
モスクワ便り　39
連載随筆「かかわりの内側」　＜宮尾彰＞　40
ロシア小話　42
振替用紙のメッセージから　44
ありがとうございました！　46
新婚旅行でイランに行く
本当はどうかを自分の目で ＜国井真波＞　48
出会い　Встреча　54
Здравствуйте！（事務局広場）　62
カルチャーレビュー　66
インフォメーション　70

表紙写真　本橋成一
文　村石　保

チェルノブイリＪＣＦ第89次訪問団報告

緊急支援から協力、そして学びあう

神谷さだ子

日程　5月10日～18日
訪問先ベラルーシ共和国ゴメリ州ゴメリ州立病院付属産院
チェチェルスク地区病院・ベトカ地区病院
放射線医学人間環境センター
メンバー・松澤　重行（小児科医）・国井　真波（看護師）
・神谷　さだ子（事務局）

支援したエコーで画像診断するセルゲイ医師、国井さん、松澤医師

タンポポと菜の花が畑地を覆いつくし、果てしなく黄色の平原が続いている。ベラルーシは、目覚めの時、小さなポプラの葉が小刻みに揺れ、陰影をなす。さわやかな風が渡っていく。

今回、第89次訪問団は、ゴメリ州立病院付属産院集中治療室、チェチェルスク地区病院・ベトカ地区病院の小児科外来で、ゆっくり時間をかけて診断や治療の様子をみることにした。視点を少し変えると、現地のドクターやナースの仕事ぶりが、よく見えてきた。

集中治療室では、昨日生まれたばかりの未熟児の世話に忙しいナースが、国井さんに赤ちゃんをポンとあずける。私たちに対するオープンな対応と親しみが伝わってきた。そして、向かい合ってすわって語り合うだけでは解らない具体的な仕事の内容やナースの役割について話してくれた。きびきびと動く様子からは働くプライドが感じられる。

ＪＣＦが、5年前に支援した超音波診断装置（エコー）は、十分に活用されていた。ドクターたちが交代でミンスクに勉強に行っていると聞いていたが、これほどまでに診断技術を上げているとは思わなかった。こんな症例がある、とセルゲイ・コバル先生がエコーのプローブを保育器の赤ちゃんにあてた。生まれてまもない小さな命は脳溢血で、近日中にサンクトペテルブルグの病院に搬送され、手術を受けることに決まっていた。半年で2～3人の重い病気の赤ちゃんがミンスクの専門医のいる病院に送られるそうだ。「心臓以外はここで手術します」と本来麻酔科医であるセルゲイ先生は語った。

超音波診断室の2人のドクターの手際の良さにも目を見張った。へその緒・胎児の状態、出産前に心臓の先天性異常を発見することできるようになったと診断の向上の成果を見せてくれた。今後、妊婦の頸膣用プローブが増えたら、出産前の赤ちゃんの状態を更に正確に把握できるので支援してほしい、とリクエストを受けた。産院の設備も数段によくなった。ドクター達も診断・治療に熱心に取り組んでいる。数年前には考えられなかった事だ。ベラルーシは、今後加速的に良くなっていくに違いないと感じた。

チェチェルスク地区病院に行こうとゴメリ到着後電話した。院長は携帯電話でこう語った。「私は、もう院長ではないので、病院にはいません」。この国では、時々こういうことが起こる。あまりに突然の事で、日本から支援した高額のエコーが設置されたのかどうか、すごく心配になってきた。病院では、ガリーナ副院長が対応してくれた。よかった！　私たちの到着する2日前にエコーは、チェチェルスクに到着していた。まだ、地下倉庫に梱包のまま、置かれていた。「エコー診断の2人のドクターも喜んでいます。セットアップに1週間かかりますが、次に皆さんが来る時は、きっと、使っていることでしょう」。

チェチェルスクにエコーを贈ろうと手続きを始めて、はや2年。ようやくホッと胸をなでおろした。2年前から始められた手術室の工事が毎日12時間以上かけて行なわれているという。ど

チェチェルスク地区病院地下倉庫にやっと到着した支援エコー

うやら、この辺に院長交代劇があったらしい。

ベトカ地区病院ナジェージダ院長は、長期夏季休暇だったが、私たちの訪問に時間を割いて駆けつけてくれた。小児科外来は、夏休みに保養所に行くために健康診断書を書いてもらう子どもたちが、お母さんやおばあちゃんと一緒に来ていた。松澤先生に聴診器を渡して、診察してもらうクセイニア先生。やはり、子どもたちにアレルギー疾患が増えているという。クセイニア先生の整然とした診察は、きっと、子どもだけではなく、付き添いの保護者にも、安心感を与えるであろう。

医療者の社会的地位も給与も低いと聞いていたが、仕事に対する誇り、働きぶりは毅然として美しくさえある。美味しい病院食の昼食をナジェージダ院長と取った後、案内していただいた地域の診療所でも、私たちは学ぶことが多かった。

緊急の時を過ぎ、共に協力し合い新しい治療法を確立してきた。そして、これからは学びあう関係に。

ナジェージダ 2007 で贈った保育器の前でベトカ病院医師（左）と休暇中に駆けつけてくれたナジェージダ院長（右）

ベトカ地区のステーション訪問
フェイシェル制度に学ぶ

国井　真波

左からガリーナさん、松澤医師、イリーナさん、国井さん、ナジェージダ院長

世界中の医療の現状について見聞きすると、「医療の地域格差」があるように思えます。

医療従事者の都市部集中は、日本に限ったことではありません。看護師である私は、医師のいない町や村で、看護師がどのような役割を担っているかとても興味があります。ベラルーシも同様で、医師は都市部に集中しています。それ以前に医師の数が足りていません。じゃあ、地方ではどうしているのか？　特に高汚染地で診療をしたがる医療従事者は少ないのではないか？

そんな疑問から、「無医村での医療活動について知りたい」とＪＣＦに申し出、高汚染地の一つであるベトカ地区のステーション（クリニック）訪問に至りました。

ベトカ地区病院のナジェージダ院長によると、ベトカ地区のステーションは全部で15箇所。具体的に地区内のどの場所にステーションがあるのかを、地図で示してもらいながら説明をしてもらってる時に、不思議なことに気が付きました。ステーションは、ベトカ地区の南に8箇所、北に7箇所あり、地図の真ん中が空白になっているのです。理由を聞くと、「ここはゾーンだから、病院はないの」と。それでもいくつかの埋葬の村には今でもパラパラと住んでいる人がいるそうです。汚染地で地図を見ながらそんな話を聞くと、チェルノブイリの原発事故がまだ続いていることを実感するのですが、

そのことを日本に帰ってどう伝えたらみなさんに肌で感じ取ってもらえるのだろう?と、もどかしさを感じます。

15のステーションに医師はおらず、フェイシェルのみが駐在しています。フェイシェルとは旧ソ連独特の制度で、今のロシアにも存在します。看護師になるために学校で2年間勉強したあと、フェイシェルになるために更に1年半勉強をして資格を得ることができます。看護師以上のこと（助産師の仕事など）ができますが、医師ではありません。そして同じフェイシェルでも技術や知識の差があるようです。

私は、ナジェージダ先生案内のもと、いくつかのステーションを訪問することができました。

その中で、印象的だったフェイシェルをご紹介します。

98年に看護師免許を取得し、3年前からフェイシェルの仕事をしているガリーナさん。

たぶん私と同世代の女性だと思います。ガリーナさんは2つのステーションを受け持っていて、1箇所は毎日患者が20人前後、午後は往診を約7件。もう1箇所でも毎日10人くらいの患者さんを診て、午後は往診もこなします。1つのステーションにつき、3キロ圏内をカバーしており、往診は自動車がないので自転車で。これを聞いたとき、そのハードスケジュールさに驚きました。

フェイシェルのガリーナさん（左）

無医村といっても、何かあれば医師に連絡をして指示をもらえるし、医療的には特に問題はないとのこと。ガリーナさんは看護師時代に外科とＩＣＵを経験しており、専門職としての責任感やプライドが高い方なんだと思います。私は今、老人保健施設で働いているのですが、医師は平日のみの勤務で17時には帰ってしまいます。そんな環境で自分が働けるのは、やはり病院時代に外科やＩＣＵを経験したからだと思うので、ガリーナさんの気持ちが分かるような気がしました。

ガリーナさんは、医療的な悩み、つまり薬が足りないとか、医師がいないので判断に困るなど、そういうことはないそうですが、村の人たちとコミュニケーションを取るのが難しいと言っていました。アルコール中毒の人、病院に行きたがらない人。そんな人たちの健康をどう守り、病気を予防するか。

ゴメリ州立病院産科医師（中央）と国井さん（左）松澤医師（右）

そしてここは高汚染地で、大人の癌も増えているとナジェージダ先生は言っていました。癌の早期発見・早期治療を行うために、フェイシェルとして何をすればいいのか。そう考えると、地域に密着して、村の人たちとともにあるフェイシェルの責任はとても重く、大切で、やりがいがあるのだと思います。他のフェイシェルは、「トラックの運転者は高血圧の人が多いにも関わらず、ステーションに来てくれません。そこで日時を決めて、彼らが立ち寄るお店で、血圧測定のイベントを行います」と言っていました。

患者さんが病院に来ないのなら、こちらが行けばいい。こういう精神やアイディアはとても素晴らしいし、私も見習います！

フェイシェルの制度は、20世紀初めにソ連でできたシステムで、社会主義の管理体制のよさが表れたものだと思います。医療の根本である、「病気を未然に防ぐ」「病気を持っている人たちの生活をサポートする」を実現できるこのシステムから学べることは、多いのではないでしょうか。

ベトカ地区では大人の甲状腺癌が増えつつあり、今後も目が離せない地域ですが、それだけではありません。ベトカ地区病院の院長であるナジェージダ先生が、フェイシェルが常駐している15のステーションを統括し、滞りなく機能させ、村の隅々まで医療を浸透させていることも、注目すべき事柄だと思います。

ベラルーシを支援するだけでなく、こちらも学ばせていただいている。そんなことを実感した、ベトカ地区訪問でした。

ゴメリ州立病院産科の赤ちゃん

バスラ緊急支援

アル・ワリード難民キャンプの子ども達と、国井さん（中央）佐藤ＪＩＭ―ＮＥＴ事務局長（右端）

イラクの人々の生活はＮＧＯ活動の中に見えてくる。北部のシリア国境にあるパレスチナ人のアル・ワリード難民キャンプ、南部バスラには米と食糧の緊急支援が必要だ。

2008 年　スタディツアー

長期入院の子ども達と共に日本の遊びや物語を楽しんでみましょう。
環境センターでは、毎年日本からの訪問を、楽しみに待っていてくれます。
参加者それぞれの創意で、ゆっくり子ども達と向かい合うツアーです。

日程：9 月 27 日～ 10 月 4 日（8 日間）
訪問先：ベラルーシ共和国　ゴメリ州
費用：　30 万円（予定）
申し込み締め切り：8 月 25 日

■ 日程表 ■

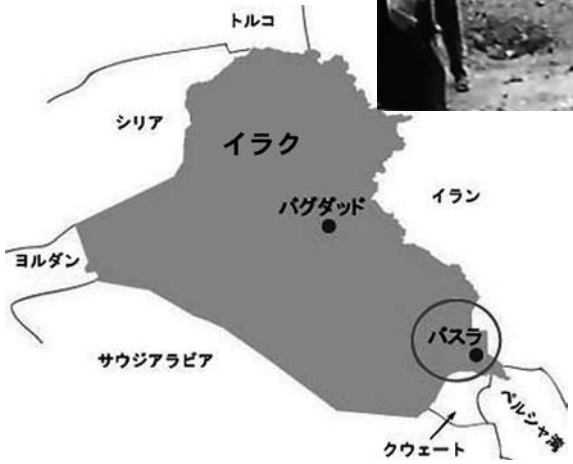
日付	行動予定	宿泊
9/27（土）	成田発 OS052 10:55　ウィーン着 16：50 ウィーン発　OS689 20:05　ミンスク着 23：00	ベラルーシ プラネット
9/28（日）	ゴメリ移動	ツーリスト
9/29（月）	放射線医学人間環境センター	ツーリスト
9/30（火）	放射線医学人間環境センター チェチェルスク地区病院	ツーリスト
10/01（水）	ベトカ地区病院・イコン博物館	ツーリスト
10/02（木）	ミンスク発 OS688 17:25　　ウィーン着 18:30	ツーリスト
10/03（金）	ウィーン発 OS051 14:05	機内泊
10/04（土）	成田着 08：20	

＜問い合わせ・申し込み＞
ＪＣＦ・日本チェルノブイリ連帯基金
〒 390-0303　松本市浅間温泉 2-12-12
TEL. 0263-46-4218　FAX. 0263-46-6229

バスラ危機　緊急支援に携わって

加藤　丈典

衝突直後のバスラ市街地



イラク戦争開始から5年。時の経過と共に人々のイラクへの関心は薄れている。ましてイラクから遠く離れた日本ではなおさらだ。すでにイラク問題は過去においやられてしまった感さえある。しかしＷＨＯの報告で世界で最も危険な国に挙げられたように、イラクが抱える問題は４００万人に及ぶ難民問題、８００万人に及ぶ孤児や寡婦問題など数え上げればキリがない。「イラクはまだ終わっていない」

その事を痛感させられたのが、今年3月に発生したバスラでの人道危機である。イラク南部の大都市バスラで政府による軍事作戦が行われ、武装勢力側との間で激しい衝突が繰り広げられた。これによって４００人以上の犠牲者、１４００人以上の負傷者を出す最悪の事態へと発展し、人道的危機を引き起こした。アラブの各紙は連日この衝突を大きく取り上げた。しかし日本では注目が低く、さして大きく取り上げられることもなかった。イラク問題に対する日本との温度差を感じさせられた。

発端は3月24日深夜、字幕によるニュース速報が流れ、バスラ全域で外出禁止、主要幹線道路の通行止め及び、学校・空港の閉鎖がイラク政府によって発令されたことであった。そしてその夜からイラク軍と武装勢力側との間に衝突が起こり、イラク内務大臣の暗殺未遂事件などが報道された。イラク政府はこの軍事作戦を「騎士の襲撃」と称し、バスラで暗躍する武装勢力や石油の横流しを行う組織に対し、「無法者に対する法の適応」という大儀のもとに決行された。

確かにこの大儀のとおり、戦争開始から5年目に入っても、バスラでは治安は改善せず悪くなる一方であり、また電気や水などのインフラの整備も遅々として進まなかった。特に今年に入ってからは、医師を狙った誘拐殺人事件が多発しており、生命の危険を感じた医師が病院に出勤できず、バスラの病院のいくつかは麻痺してしまうという事態に陥っていたのである。

バスラがこのように武装勢力の温床となってしまっていたのには理由がある。一つはこの辺りが豊富な石油地帯であるということ、そして次にいくつも他国との国境を有しているがために、外国から武装勢力の侵入が容易であるということ。このような事情によりバスラにおいて一斉取り締まりを行うために軍事作戦を起こしたのだというのが政府側の主張である。

しかし一方ではこの軍事作戦には別の背景が存在する。実はイラクでは今年10月1日に県議会選挙が控えており、与党勢力は石油地帯であるバスラを選挙での勝利によって何としても押さえたいという目論見があった。しかしそこで最大のライバルとなるのがイスラーム教シーア派勢力、ムクタダー・サドル師率いるサドル派である。このサドル派の勢力を削ぐために今回の軍事作戦が行われたとする見方が強くなされている。

理由はどうあれ、この衝突の犠牲者は市民であった。衝突から一夜明け、バスラから1通のメールが届いた。そこには短くこう書かれてれていた。「バスラは血の朝に目覚めたよ…」

バスラに通じる陸、海、空のあらゆる出入り口が封鎖されたために物流は完全に停止。さらにこの衝突があまりにも唐突だったために市民は水、食料の備蓄をもっていなかった。およそ1週間の間、市民は飢えと乾きに耐えなければならない状態が続いたのである。作戦遂行中、政府は外出禁止令を徹底し、「これを守らずに、外出した者はたとえ市民であっても標的と見なす」として市民への配慮をまったく欠

いた半ば強引な作戦展開を行ったのである。中には乾きに耐えきれず、水を求めて外に出たために殺されてしまった市民もいた。また男性だと標的にされやすいということで、危険をかいくぐって外出した女性もいた。物価は上昇し、特にバスラの貧困層の間で人道的危機が広がることが懸念された。衝突が続く中、負傷者が出ても搬送することができなかったり、搬送できたとしても路上に仕掛けられた地雷によって車ごと吹き飛ばされたりと、充分な救命活動ができない悲惨な状態が続いた。

クウェートにて、バスラ、サラワーン地区への飲料水を準備する加藤さん

衝突開始から1週間後にようやく外に出られるようになって、市民が真っ先に行ったことは路上に放置されたままになっていた遺体の埋葬だった。テレビでは身内を失った多くの家族が一斉に集団墓地を訪れ、喧噪と悲嘆のただ中で犠牲者を弔う様子が映し出された。まるで建築資材でも運んでいるかのようにトラックの荷台から白い布に包まれたたくさんの遺体が人々の乾いた手の上を流れた。

イラク政府は早々にこの作戦の勝利を声高に宣言し、国連なども危機は過ぎ去ったとして緊急支援を早期に切り上げてしまった。しかしその後もバスラの各地で衝突は続いていたのである。今回の危機では報道と現地の声の間に大きな乖離があった。

米、砂糖、食用油などの支援物資を嬉しそうに持ち帰る、
バスラ、ズバイル地区の人々

事態を重く見た我々は、緊急支援を行うことを決定し、クウェートからバスラ南部の貧困地区サフワーンにペットボトル飲料水約2トンをローカルスタッフの協力のもと配給した。さらにバスラのズバイル地区の貧困者を対象とした食料支援を国際NGOの協力によって行った。

バスラ中心部に位置する小児産婦人科病院でも衝突の爪痕が深く残された。病院では一部の医療器具や検査機器が破壊されていたり、盗まれたりした。また患者が病院に来られないため、必要な治療も中断してしまった。事態が鎮静化した後も、軍による交通規制が継続していたので、患者家族は時に病院で夜を明かすことを余儀なくされたりした。我々はこういった患者家族400組に対する食料支援をローカルスタッフを通じて行った。物価の上昇はたださえ貧しい病人を抱える家族をさらに圧迫したのである。JIM―NETはこれまでにこのバスラの小児産婦人科病院へ不足している薬品、特に抗がん剤などの支援を行ってきたが、今回の衝突によって治療が中断してしまえば、これまでの治療は水泡に帰してしまう。病院への緊急支援は必要不可欠なものだった。今度いつ同様の危機がおこるかわからない。長いトンネルは続いている。

女性の頭の上に水をのせるローカルスタッフ
イブラヒム

「イラクは終わっていない」と、ある人が言った。脆い人間の記憶は簡単にこの悲惨な戦争を風化させてしまう。しかしこの言葉は吹きすさぶ風の中どっしりと根を下ろした木のように、悲惨な戦争の像を留めようとする。人々の無関心さに対する警鐘としてだけではない。おそらく自分自身に対しても呟いたのかも知れない。厳しい状況が続いているが、この言葉には今回のバスラ支援に従事した際とても勇気づけられた。

加藤　丈典（かとう　たけのり）
同志社大学神学部卒業後、クウェート留学。2007年6月に行われたJIM―NETクウェート会議での通訳ボランティアをきっかけにJIM―NETの活動に加わる。2008年4月からJCFイラク支援現地事務局スタッフとして、イラク医療支援のために奮闘中。

アルワリード難民キャンプへ
血液分析機支援

国井　真波

アルワリード難民キャンプで赤ちゃんを抱く国井さん

私はアルワリードの仕事が終わるや否や、激しい嘔吐と胃痛に襲われ、丸一日寝込んでしまいました。

―今思うと、アルワリード難民キャンプ行きが決まってから、自分が想像していた以上のプレッシャーを感じていたんだと思います―

看護師の私としては、一生の不覚の出来事でしたが、難民キャンプでの半日は私にとってかけがえのない財産になりました。

「難民キャンプに、血液分析器をいれる」

そう聞いたとき、砂埃が舞う灼熱の難民キャンプと医療機器がどうしても結びつかず、「本当に必要なんだろうか？」と私の頭の中でずっとぐるぐるしていました。

それよりも、予防接種はきちんと行えているんだろうか？　感染症は蔓延していないだろうか？　家族計画は行えているんだろうか？

想像だけ膨らませていてもラチがあかないから、とにかく現場に行ってみよう！

そんな思いのシリア行きでした。

アルワリード難民キャンプは、シリアからイラクの国境を越えてすぐのところにあり、約１６００人のパレスチナ人が暮らしています。イタリアのＮＧＯに雇われている若いドクターが一人で、１日約１００人の患者さんを診察しています。そのうちの多くが不定愁訴の患者さんで、本当に診察が必要な患者さんは１日20人から30人との事。そのドクターから「血液、尿、便の検査ができる器械が欲しい」とリクエストがあり、詳細をインタビューするために私が現地に向かうことになったのです。

医療従事者といっても私は看護師であって医師ではありません。普段日本では、医師の指示通りに検査に出す検体を採取するだけで、それ以上の知識はありません。まして日本であまり見かけない疾患の検査方法についての知識は皆無です。

そんな状態の私が現場に行って、一体何ができるんだろうか？。

アルワリード難民キャンプに着いてまず気になったのは異臭でした。何かが臭う…。

私が到着した日は、偶然にもイギリスのＮＧＯやＩＣＲＣ（国際赤十字）の訪問と重なり、また、学校行事もあり（ここのキャンプには子どもたちが通う学校があります）、キャンプの唯一の医師であるタリクさんと話すことができたのは、まずは着いてすぐの30分間でした。しかし、Dr.タリクの流暢な英語が聞き取れず、致命的だったのは疾患名を英語で言われても私にはわからないことでした。時間だけが過ぎていき、気だけが焦ります。そしてタイムアウト。

「一体私は何をしにここに来たんだろう…」

しかし落ち込んでいるヒマはありません。Dr.タリクがＩＣＲＣと打ち合わせをしている間に、私はキャンプ内を見てまわり、家庭訪問を繰り返しました。Dr.タリクは話の中で、「今、キャンプ内で起こっている感染症は、水、ゴミ、尿などの管理が悪く、衛生状態が良くないことが原因です」と言っていました。じゃあ、まずその衛生状態を確認しよう。それから疑問に思ったことをDr.タリクに質問しよう。

Dr.タリク（右端）の話を聞き取る国井さん（左端）

最初のインタビューに失敗したのは、私自身、医療機器の必要性を実感していなかったからです。もちろん私の英語力に問題があるのは明らかですが、それ以上に気持ちが入り込めていない自分がいることに気が付きました。熱意や意欲があれば、ある程度の語学力がカバーできることを、私は今

までの経験から知っています。

最初に訪問したテントで、１９４８年に6歳でパレスチナを追い出された男性の話を聞きました。今では自分の足で歩くことができず、車椅子の生活です。どんな思いで、故郷のハイファを追い出され、イラク国内を転々とし、今このキャンプにいるのか。

涙を流しながら彼は最後にこう言いました。

「48年のナクバ（大惨事）ではなく、今のこの生活の困難さに関心を示してください」

私はとにかくこの言葉に、ガーンと強いショックを受けました。

強制的に故郷を追い出されたパレスチナ人が、自分の生まれ育った地に帰りたいのは当然のこと。しかし、それ以上に、厳しい今の現実があるわけです。とにかく今の生活を少しでも良くしたい。水も食料も充分でなく、住むところを自由に選べず、テントの中は夏は熱中症になるくらい暑く、冬は凍えるように寒いのです。

汗だくになりながら話を聞き終えたあとテントの外にでると、異臭が…キャンプに到着してから気になっていたこの臭いは、排泄物の臭いと、腐った水の臭い、そしてゴミの臭いでした。テントとテントの間には腐った水が溜まり、ゴミが散乱しています。キャンプ内のところどころに大小さまざまな穴が掘ってあり、そこには生活廃水と便が溜まっています。ゴミはゴミ箱からあふれ出ていて、トイレは場所によってはきれいなところもありますが、ペットボトルや砂が散乱し、汚物にまみれているところもありました。ちなみにトイレにペットボトルが散乱している理由は、水洗トイレの水が何らかの理由で流れないため（水不足か、つまったか）ペットボトルに水を汲んで流します。その使い終わったペットボトルをトイレの床にそのまま捨てて行くわけです。そんな中で人々が生活し、子どもたちが遊び、犬猫が通りま

テントの間にはゴミが散乱

す。

水が圧倒的に不足しています。毎朝6時にＩＣＲＣが水を給水タンクに入れ、3時間後の9時にはカラになります。人々の水浴びは3～4日に1回。水浴びの囲いがないため、大人の女性も外で水浴びをします。イスラムの女性でなくてもこれには抵抗があります。これではきちんと清潔を保つことができません。そして人々は口々に、「水があまりきれいではない」と言います。そんな中、発熱、嘔吐、下痢、痛み、腫れなどなど訴えがあれば、様々な感染症が考えられ、早く原因菌（ウィルス）が特定できれば、それだけ患者さんが苦しまずに済むし、薬の無駄遣いを防ぐことができます。

もしキャンプ内で治療ができない場合、２００キロ離れた街の病院に搬送します。搬送費は1回３５０$。毎月約11回。つまり毎月莫大なお金が出て行くわけです。イタリアのＮＧＯが充分な薬を供給しているので、キャンプ内で検査ができれば、輸送費の莫大な費用が削減できると私は思いました。「ここのキャンプには、検査機器が必要」という確信が私の中に芽生え、「Dr.タリクと機器の導入に向けて詳細を詰めなければ」と、もし必要な機器が適切に導入されたらキャンプの医療環境はどんな風に変わるんだろうと、ワクワクしてきました。

ここからは話が早いです。話し合いの時間が2時間取れるというDr.タリクを捕まえ、わからない医療用語は私が持参した電子辞書を駆使しながら話を進め、キャンプに同行してくれたＪＩＭ―ＮＥＴ事務局長の佐藤さんにところどころフォローしてもらいながら、自分の口で話を進めていくことができました。

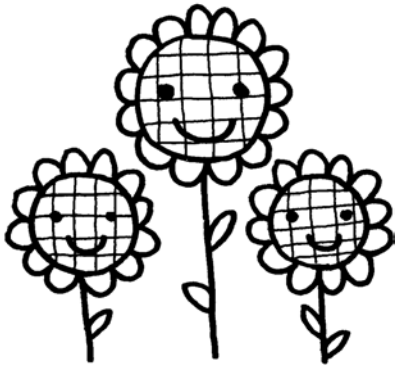
あとは帰国してから、血液・尿・便の検査機器がいかに必要で有効活用してもらえるかをレポートにまとめるわけですが、もし機器が導入されたとしても、それが医療環境改善の根本的な解決方法になるわけではありません。水、ゴミ、トイレ、保清行動などを改善し、病気になる前に予防することが本当は一番大切なのです。これはＪＣＦだけでどうにかなることではありま

給水車

せんが、衛生状態の改善も視野に入れながら、機器の導入ができたらと思っています。

病気を予防することは医療で一番大切なことであるにも関わらず、難民キャンプに来ると、目の前の患者さんを診察することに精一杯で、なかなか「予防」の視点を持つことができませんでした。今回、予防の視点でキャンプ内を見るのにとても役立ったのは「スフィアプロジェクト」です。これは、国連やＮＧＯ関係者が共通の支援を行えるように、給水やし尿処理、排水、衛生状態などの最低基準がまとめられたものです。これをもとにアルワリード難民キャンプの状態を客観的に見ていきました。

このキャンプにいる１６００人のパレスチナ人にとってベストなのは、早くキャンプから出て、自分の好きな場所で安全に暮らすことだと思います。けれどもそれが今すぐに叶わないのなら、少なくとも適切な医療が受けられるお手伝いをしたいと思いつつ、キャンプをあとにしました。



10年目のイラクを思う

鎌仲　ひとみ

上映会で講演する鎌仲ひとみさん

■　スウェーデンのイラク人

２００８年５月にスウェーデンに行ってきた。環境先進国スウェーデンの取り組みを取材にいったのだ。

その取材でストックホルム郊外の町を訪れた時、イラク人を多く見かけた。おしゃれな格好でショッピングモールを行き来するイラク人の姿は日本人のわたしなんかよりよっぽど町に溶け込んで違和感がなかった。赤ちゃんを抱いたお母さん。小学生ぐらいの娘と歩くお父さん。乳母車に子供を乗せていく若い女性二人組。難民そして、移民となり祖国を出てきたイラク人にとって北欧の暮しはけっして楽なものではないだろう。それでもスウェーデン

スウェーデンのショッピングモールのイラクの人々

は平和で当たり前に町を歩くことができる。スウェーデン政府は8万人のイラク難民を受け入れている。この数は米・英が受け入れたイラク難民の数よりも多い。その一人一人に職業訓練と語学教育を提供し、その間生活保護を支給している、というのだ。

ひるがえって、日本はイラクへの武力攻撃を率先して支持しておきながら、ただ一人もイラク難民を受け入れてはいない。恥ずかしいことだ。私は心の中でスウェーデンの人たちにありがたい、と思うと同時に、日本のそういうあり方をやりきれないとも感じた。

■　10年前のイラク

10年前、1998年、初めてイラクを訪れた時、バグダッドはこのスウェーデンの町のように平和に見えた。少なくとも当たり前に人々は町を歩いていた。夜10時頃、バグダッドの目抜き通り、サドゥーンストリートは夜風を求めて散歩する人々で賑わっていた。手と手を取り合って歩く夫婦。子供を両腕に抱えた父親。子だくさんの家族連れ。私はそんな通りに、夜な夜なビールを買いだしに行った。「経済制裁で瓶を作れなくなっているから、早く飲んで瓶を返してくれよ」と酒屋のおやじは真顔で私に言ったかと思うと、すぐ、にっこり笑ってウインクした。

ビールを初めて造って飲んだのはチグリス・ユーフラテス文明の頃だと言われている。そのビールも経済制裁下、地元の原料だけで醸造されていた。2003年、イラク戦争が起きて、多くの酒屋が射殺されたと聞いた。あのおやじは無事に生きのびているだろうか？　あの戦争以来、400万人が難民となっている。そのうち国外に脱出できたのは200万。半分が国内でさまよっていることになる。今から思うとくらくら眩暈がするような時間の経過がこの10年あったのだと思い知らされる。当のイラク人にとってそれは、もっともっと激動の10年だったろう。

つい最近の国連が世界各国の平和度を調査した。最下位はイラクだった。

■　見えない戦争と見える戦争

1998年当時、私は初めてイラクの白血病の子供たちと出会った。その様子は映画「ヒバクシャ―世界の終わりに」の冒頭に出てくる。子供たちは自分に何が起きたのか、理解できないままに不安そうな表情を浮かべ、ベッドの上にいた。そこで出会ったサアードは当時13歳だったが8、9歳ぐらいにしか見えなかった。栄養失調だったのだ。

「わたしを忘れないで」というメモを残してなくなったラシャ

白血病に加えて栄養失調がある。しかも経済制裁で抗ガン剤などが不足している。それでも現場の医師たちは必死に働いていた。

マンスール病院の白血病棟で初めてマーゼン医師にであった。彼はまだインターンだった。フランスに研修に出かけたサルマ医師の代理で子供たちの往診をしていた。サアードの母親は骨髄穿刺の検査の後、麻酔から覚めない息子の足をもみながら、

「この子は助からない、この病気になって助かった子供はみたことがない」

とつぶやいていた。その言葉どおり、病棟では、日々、子供は死んでいった。14歳のラシャも…。院内感染をしたのに病院には抗生物質が全くなかったのだ！　彼女は「わたしを忘れないで」と私あてにメモを残して死んでしまった。

町に出れば、一見平和に見えたし、そこには今のような自爆テロも、完全武装してイラク人を狙撃したり拉致してゆく米軍の姿もなかったが、病院の中は静かな戦場と化し、子供たちの犠牲は続いていた。病気になっていない子供たちもストリートチルドレンになったり、学校の崩壊によってまともに教育を受けることができないでいた。湾岸戦争前と後では子供の体格がまったく違うのだ。あの時、10歳だった子供たちはすでに成人しているはずだ。果たしてどれだけ生きのびているだろうか？

2002年に再びイラクに訪れた時、経済制裁を直接の原因として100万人以上の15歳以下のイラク人の子供が亡くなったと、WHOが報告していた。

死んでゆく子供たち―むごい現実を撮影しながら私は何もできなかった。それでもこの現実を映像で知らせれば、何かが変わるはずだと思っていた。NHKの番組取材で行っていたのだ。600万人がNHKの番組でイラクのこの現状を観れば、非人道的な経済制裁になんらかの変化がもたらされるはずだと期待していた。

番組はおおもめにもめながらも放送された。薬不足にあえぐ医療現場、絶望する親たち、必死に生きる子供たち、そして―死。けれども放送後、何の反響もなかった。大き

なショックだった。本当に人々は番組を観たのか？　なぜ反響がないのか？　私には解らなかった。

■　被ばくの本質を知る―内部被曝

私は取材しながら、つらい子供たちの状況を撮らせてもらうために、お母さん達に知らせることで現実が変わる、だから撮らせてくれと頼んでいた。しかし私の番組は無力だった。ではどうすればいいのか？　医療支援をするしかないと思った。

紹介されて頼みに行ったのは当時83歳の肥田舜太郎医師だった。肥田先生は

「イラクの子供たちは被ばくしているヒバクシャだ。劣化ウラン弾の微粒子が体内に入り身体の中から放射線を浴び、遺伝子を傷つけられている―内部被曝が病気の原因だろう。しかし、被ばくそのものは今の医学では治療することができない。」

というような事をさらっと言い放った。

「内部被曝」「遺伝子が傷つけられる」「イラクの子供たちはヒバクシャ」最初は良く理解できなかったが、理解できた瞬間私の頭と心はぐるぐると回転した。「医療があればいいと思っていたのは間違いだった」「被爆者って広島と長崎だけではなかったのか?」「ではこれからも被ばくは続くのか?」そして最後に半減期が45億年の劣化ウラン弾によってイラクの大地は永遠に汚染され、そこに暮らすことそのものが被ばくにつながることを理解した。衝撃だった。私もまた、その汚染地に行き、しかも取材の最後には「砂漠のキツネ作戦」という4日間の爆撃のさなかバグダッドに滞在し、劣化ウラン弾の粉塵を浴びていた。被ばくは過去ではなく現在進行形なのだ。

肥田先生との出会いによって、世界が全く違って見えるようになった。刻々と被ばくし続ける世界。戦争が終わった後も子供たちをがんや白血病にする兵器の存在。私は大きな宿題を抱え込んだ。そして何ができるか考えた時、「被ばくの本質を描く映画を作る」ことにした。

サマワのハウラ・ジャーメル（10歳）は10キロ離れた場所から病院に来る

映画は6年後、２００３年に完成したが、すでにイラク戦争は始まり２０００トンもの劣化ウラン弾が打ち込まれてしまっていた。晩発性の発症が始まる前にイラクは途方もない混迷と戦乱に飲み込まれていた。人々は目の前の危機から逃げるだけでも精一杯だし、犠牲は今も続いている。その一方で目には見えないが被ばくもまた進行しているのだ。

■　医療支援が始まった

イラク戦争以来、イラク国内には全く入れなくなってしまった。それでも２００４年から鎌田實先生がイラクへの医療支援をしてくれるようになった。JAPAN-IRAQ medical network（ＪＩＭ―ＮＥＴ）の始まりだ。以来、イラクへの医療支援は続いており、そこに投入された日本人による善意のお金はこの４年間で一億一千万円以上になる。それよりも何よりも実際子供たちの命が救えているし、イラクの医師たちとの信頼関係が築かれてきた。なんて素晴らしいことだろう。劣化ウラン弾を打ち込んだのも人間なら、それによって傷つけられた人間に手をさしのべるのもまた人間なのだ。

途方もない試練を今、イラクの子供たちや人々は受けている。絶えられないような想像を絶するような状況の中で今も、病院のベッドの上でイラクの子供たちはあどけない顔を不安で曇らせているだろうか？　子供たちの行く末を心配して、親御さん達は夜も眠れないだろう。時々送られてくる子供たちの写真に私は見入る。不思議だが、その途方もない試練を受けている子供たちの顔に私は光を感じる。生きることをあきらめない力がそこにあると感じるのだ。

隣の国、ヨルダンで久しぶりに対面したマーゼン医師は10年前のインターンの面影を残しつつイラクの小児がん治療を担うリーダー的な医師に成長していた。どんな苦難をこの人は乗り

07年クアラルンプール医療会議で、マーゼン医師

越えてきたのだろう、生きて再会できたことを本当に喜んだ。

この時、マーゼン医師とサルマ医師と話したことを私は忘れないだろう。戦乱のバグダッドから平和なヨルダン、アンマンの町中を歩く二人はこういったのだ。

―バグダッドの暮らしは本当に大変です。日々命の危険にさらされ、帰宅するまで家族が無事かどうかも確認できません。ガソリンがなくて6キロの道のりを病院まで毎日歩いています。その道で何度か自爆テロが起きています。いつ命を奪われるか誰にもわからないのです。それでも病院に毎日行くのは患者がそこで待っているからです。それが私たちのモラルなのです。イラク人の心とモラルはすっかり荒廃してしまいました。この17年間というもの私たちは普通の生活を知らずに生きてきたのです。普通だったら実現できる当たり前の人生の楽しみをあきらめて生きてこなければなりませんでした。そしていつになったらその普通が手に入るかも解らないのです。

イラクに留まるのは大変です。でも今、こうやってアンマンに居て普通の生活が普通にあるのをみているのはもっと苦痛を感じます。なぜなら私たちには手にすることができないものだからです。

イラクにいるよりももっともっと心が痛みます。イラクに帰れば全てのイラク人が同じ苦難を生きているから、こんな痛みを感じなくてもいいんです―

私たちは忘れてはいけない。この人たちが生きようとしていることを。そして助けを必要としていることを。そしてその苦難を与えた責任についても。

最新作「六ヶ所村ラプソディー」では劣化ウラン弾の原料となる劣化ウランを生み出し続ける原子力産業の内実と私たちの暮らしの関係を描いた。子供たちの未来のために私たちができることは沢山ある。その一つはエネルギーをシフトすることだと思う。

青森県六ヶ所村使用済核燃料廃棄物再処理工場

2008年度　理事会・総会報告

6月13日（金）　18時～20時半
於：早稲田奉仕園6F　フォークトルーム（東京都新宿区西早稲田）
理事14名　委任状3名　監事2名
オブザーバー13名

鎌田理事長挨拶

日本全体のチェルノブイリのNGOが撤退する中で、どうしていくか岐路に立っている。チェルノブイリ原発事故の被害、問題点をきちんと監視していかなければいけない。初期のようなアクティブな活動は、無くなっていくが、継続することが大切だ。汚染の厳しいベトカ地区は支援を待っている。遅れた地方の病院と連携をとっていきたい。産科・未熟児の支援も必要だ。

認定法人格の取得を目標に動いている。今後JCFをどう持続していくのか、ご意見をいただきたい。

議事

1、2007年度活動報告
2、2007年度決算報告および監査報告
3、2008年度活動計画
・チェルノブイリ医療協力
・イラクの白血病支援

●バスラ緊急支援…加藤

今年はアメリカの侵攻から5年。保健福祉行政については手付かずのまま軍事作戦ばかりをやってきた。こども達が学校に行けない。国外で400万人が難民として生活している。

3月24日突如軍事作戦が起こった。バスラ地域は石油資源がとても豊富な地域。マフディ軍の一斉取締りのために、政府は治安状態を改善するために軍隊を送り込む。400人死亡1400人負傷。

日本でこの報道がなされていないことに、とっても驚いた。イラクに対する関心も薄れている。一部の地域では、政府が危険地域を制圧したとニュースが流れているが、その後もバスラ母子病院院内学級のイブラヒム先生や、ドクターたちは危険な目にあっている。

●アルアリード難民キャンプ…鎌田

シリアがしばらく難民の受け入れをしていたが、もともと貧しい国なので、ゲートを閉じてしまった。そこに難民キャンプができてしまっている。

この1年間、JCFがJIM―NETに参加するようになったのは、JCFの根本にある原子力の問題と、劣化ウラン弾による放射線被害の問題からであり、参加することに大きな意味がある。毎月400万円分の薬をJIM―NETで送っている。

4、2008年度予算案
・CDの収益事業について説明。
・助成金の見積もり
収益をあげて、スタッフ給料・退職後の問題も解決していきたい。

●検討事項
1、会員制度の見直し
〈定款〉第3章　会員
JCFがNPO法人になった段階で、特別賛助会員（3万円）・理事が正会員→社員にと認識していた。しかし、定款の文言に記されていない。定款の改定について審議した。
〈提案〉
活動に責任を持って関わる…社員
応援するが議決に関わらない…賛助会員
会費について
正会員1万円（何口でも）
賛助会員3千円（何口でも）
〈意見〉
・一口の金額を多くするよりも、少なくしておいた方が、若い人や主婦やいろんな人が参加しやすい。
・次の世代の若い人たちに参加する意識を持ってもらう。
・団体会員の議決権は、団体で1票とする。
結果以下のように改訂する。
〈定款〉第3章　会員
第6条この法人の会員は次の2種とし、正会員をもって特定非営利活動促進法上の社員とする。
（1）正会員　この法人の目的に賛同して入会する個人及び団体
（2）賛助会員　この法人の目的に賛同して、資金協力を行う個人及び団体
2、収益事業について定款の改定
第2章事業について項目の追加
・収益事業についての定款について何も記載がないにも関わらず、CD販売のような収益事業がでてきたのは問題である。
・収益をあげて、本来の活動費に含めるのが収益事業。
・特定非営利活動事業に入っているものでも、税金のかかるものとかからないものがある。
・お金を得るための事業と判断されるものは、その他事業にし、会計を別にし、収益を得た分を活動経費へ回す。
以上の意見から、以下のように定款を変える。
〈定款〉第2章
この法人は、第3条の目的を達成するために、次の事業を行う。
1特定非営利に係る事業
①調査研究事業
②医療支援事業
③文化交流事業
④広報学習事業
⑤その他、本会の目的を達成するために必要な事業
2その他の事業
①物品販売業

②賃貸事業
前項第2号に掲げる事業は、同項第1号に掲げる事業に支障がない限り行うものとし、その収益は同項1号に掲げる事業に充てるものとする。

●小児科・松沢重行医師より産科支援について報告。
ゴメリの州立病院…地域の問題のあるお母さんたちが集まってくる。
1日に10人出産。日本と比べると歴然とした死亡率の差があった。
現場の人に喜んでもらっているのが5年前に送った、超音波診断機・血液検査機器。大切に使ってもらっている。血液検査試薬は定期的に送らなくてはいけない。新生児死亡率があきらかに減ってきている。物ではなく、知識の支援を欲する意見が出てくるようになった。
汚染地区で患者さんが増えていても、うまく治療できていない。サポートしていくことが必要。高汚染地域が国の恩恵を受けているかというとそうでもない。そこに触れようとしていない、と感じた。

●甲状腺がん
最近、大人の甲状腺がんも増えている。かぜをひきやすい。アレルギー・心臓病・脳卒中の人が増えてきた。
事故との関連を分けて考えにくい。

●チェルノブイリの支援活動について
事故から22年経った。現地でも日本でもチェルノブイリは風化しつつある。JCFのチェルノブイリ支援の方向性について意見を聞いた。
・意思決定者は少なく、参加できる人は多くするのが、団体として成功する鍵。中途半端は人を困惑させるので、より強いリーダーシップを発揮すべき。
・ひとつの組織が支援を終了したから、と引くのではアイデンティティがない。収入が減ったものをカバーする企画をしていく。学生たちにとって会費が高いというのであれば、ボランティアで働いてもらうなど、より楽しい組織を作るのもいい。
・理事の意見を尊重して、事務局の力を増すほうが良いと思う。
・事務局だけでなく、皆で関わりたい。昔はくだらないことでも、声をかけられて関われていた。今は、総会で集まることのほうが多い。
・きっかけがチェルノブイリの後遺症の人たちの医療支援だ。この22年が緊急支援から、継続支援に変わった。
・ベラルーシの外への依存度を少なくするのが、国際NGOの使命でもある。関わるほど、依存度が高くなるので、まだ、足りないから支援をするというのは問題。通常の団体はお金が集まらなくなったので支援を終了する。資金

を出す側の判断はシビア。カタログハウスが支援を打ち切ったのは何か判断があったのでは。自前で集めてどうにか頑張って行くというスタンスが必要。

・どういうふうに判断したらよいか難しい。支援する国の人たちが自立することが大事という話もわかるが、まだそこには至っていないように思う。松沢先生のお話も聞いて、続けていくことが重要だと思う。カタログハウスの医療支援費が終わるならば、自分達の収益事業を増やしていく方法を考え、やり続けていって欲しい。先日も「みえない雲」の上映会をした。6月26日にはもんじゅの問題を取り上げるが、その基盤はやっぱりチェルノブイリ。きちんと考えている団体と一緒にやって行きたいと思っている。

・1991年に入ったときは、薬もなく大変な状況だったが、あのときの緊急性の高さに比べると、随分落ち着いてきたということで、世界でいろんなことが起きている中で、緊急性という意味はなくなってきているかなと思う。イラクの支援については、大変な状況にあると思うが、現地に入れないので、希薄に感じてしまう。もう少し声をかけていただき、応援できるところは応援していきたい。

・実際的な運営の方法と、チェルノブイリというキーワードが終息してると感じている。イラクがあまりにもリアルすぎて、入れない。そういうところは本当に緊急性があると思う。

・アイデンティティについては方向性が問われている。

・一番大事な岐路にきている。はっきりとした考え方を会員に明示する。

2007年度収支報告書（2007.4.1 ～ 2008.3.31）

科目	今年度決算額
経常収入の部	
会費収入	1,717,000
寄付収入	13,283,327
助成金収入	38,468,601
ＣＤ事業収入	12,467,570
その他事業収入	2,854,150
収入の部合計	68,790,648
経常支出の部	
チェルノブイリ支援	18,388,030
イラク支援	23,882,398
スタディツアー経費	264,950
国内広報活動	2,499,809
CD事業費	10,331,340
管理費	13,366,849
法人税等	1,384,000
支出の部合計	70,117,376

前期繰越金	46,386,475
今期繰越収支差額	45,059,747

鎌田理事長

事務局長が辞めたらどう進めていくのか。若い世代にいかにバトンタッチしていくか。ＪＩＭ―ＮＥＴの東京事務局とうまく連動したりして、なんとか続けていくことは可能ではないのか？理事の人からもっと声をかけてよという言葉もとても心強かったし、イラクの問題も、環境と平和の問題とつながっている。認定法人をとって、次の世代につなげられるようにやっていこう。

通常総会報告

出席社員12名　委任状4名

理事会の審議結果を提案―
活動報告・収支決算・活動計画・予算案・定款の変更・役員の選任を承認した。

◆ 新しいＪＣＦ会員制度◆

2008年度総会で審議された結果、会費制度が変わりました。

■正会員；会員総会において議決に加わることができます。

年会費　一口10,000円（何口でも）

（会費をお振り込み下さった方には正会員入会申込書をお送りします。
正会員としてご入会下さる方はご署名の上ご返送下さい。）

■賛助会員：この法人の目的に賛同して、資金協力を行う個人及び団体

年会費　一口3,000円（何口でも）

★今までと同様に会費納入から一年間が会員有効期限となり、
「グランドゼロ」やイベント等のお知らせをお送ります。

大勢の皆さまに会員としてＪＣＦを支えていただくように、よろしくお願いします！

■ＪＣＦ会費振込口座

郵便振替口座番号	00560-5-43020
加入者名	日本チェルノブイリ連帯基金

小平で春を迎えたスライド つながる輪！

武田裕子
（ナージャの輪）

スライド『ナージャ希望の村』、7人の仲間と制作したのはもう7年前？　しばらく我が家で冬眠中だったスライド、久しぶりに登場です。この3月春休みに茨城からちょっと遠く、東京小平市の公民館へお出かけ。呼んで下さったのは、小平に住む尾川直子さん。

きっかけは、映画『ナージャの村』の監督本橋さんの中野オープンスペース企画、「おもしろ学校ＩＮポレポレ坐」で初めて尾川さんとお会いしたこと。昨年の7月、シリーズ4回目の企画・国語の時間が、「幻燈『オッペルと象』＋朗読青木裕子さん＋トーク小林敏也さん」でした。私の手元にある小林さんの「画本・宮沢賢治シリーズ」の初版本『どんぐりと山猫』は、表紙はもうボロボロ。四半世紀以上をともにした、私の大切な宝物です。小林さん自ら幻燈技師となり、さすがプロのアナウンサー、青木さんの朗々とした声に引き込まれ、隣の人の息遣いが聞こえるほどの小さな会場は一変、摩訶不思議な世界に……。

さて、その幻燈会で、一緒にスライドを制作した纐纈あやちゃんとの再会も楽しみにしていました。私たちの近くに座っていた尾川直子さんは、小学生の娘さんとご主人の3人で幻燈会にいらしていて、穏やかな笑顔が印象的な方でした。会のあと、打ち上げ会でも近くに座りました。私とあやちゃん、ちょっと年は離れているけれど仲のいい、ふたりのなれそめ（?）話から、「ナージャ」のスライドの話になり、「小平でスライド上映会ができたらいいね。今日の幻燈会みたいに、親子で見ることができたらいいね」という話になり、「つながり」ました。

尾川さんはできれば年度内にと、即行動。市民サークル「小平で映画を見る会」の仲間の方たちと、地元小平市中央公民館の主催企画として「市民学習奨励学級・げんぱつでじこがおきたら」を計画して下さり、親子スライド会の実現となりました。

そして、あっという間に春休み。当日はサークル仲間のお子さんたち小学生5人、そのお父さん、お母さん、ポスターを見てきて下さった方、公民館職員の方、約30人。会場はアットホームな雰囲気でした。暗幕を引き、明かりを消すと、元気な子どもたちも一瞬しーん……スライド会の始まりです。

上映時間は20分。久しぶりに見たスライドは制作した頃の思いが込み上げ、感慨深いものがありました。冒頭の日記「１９８６年4月28日月曜日　おととい、チェルノブイリ原子力発電所で事故が起きたそうだ。ヨーロッパのチーズはしばらく食べない方がいいだろうか」…暗転しサイレンの音。チェルノブイリ原発4号炉の写真、ゴメリ州立病院小児病棟の子どもたち。そして2番目の日記「１９９９年9月30日木曜日　東海村で原子力事故が起こった。どうしていいか、わからない」と日色ともゑさんの声。この2つの日記を入れようと決めたのは、スライド制作終盤の頃。東海村ＪＣＯ事故の事実を、このスライドに入れるか入れないか、7人の制作メンバーはそれぞれの思いを出し合い、何度も何度も話し合いました。「どうしていいかわからない」というあの言葉は、事故の翌日、私が、あの時の私たちが、つぶやいた言葉です。前日から明け方まで続いた「臨界」、朝から雨戸を閉め切り、唯一の情報源だったテレビにすがるように過ごした「屋内待避」。不安そうに母を見上げる子どもたちを前に、「母さんも、どうしていいかわからない」としか言えなかった、自分自身の言葉でした。

スライドは、ギターの音色とともに、8歳のナージャ、その家族とのドゥヂチ村での豊かな暮らし、豊かな自然、その土地で作った本当に美味しそうな食べ物と次々に写し出していきます。そして、映像には見えるはずもない放射能……。

スライドは、映画のように大きな会場でなくても、気軽に集まって自分たちの手で映写できます。人との出会いの中で、みんなと一緒にいのちの大切さについて考えたい。「本当の豊かさって何なんだろう?」と考えるきっかけになってくれること。そして、未来を創る子どもたちに伝えたいという思いが始まりで作りました。あえて20分にまとめたのは、一緒にスライドを観た人たちが輪になって、その場で、今思っていることを話し合える時間がもてるように、との思いからでした。

今年、東京の桜は3月末には満開。スライドが終わり、暗幕を開けた会場の窓からも桜並木、春爛漫の景色です。一言、感想を聞きたかった子どもたちは、早々に外に飛び

出してしまいました。

心残りながら気を取り直し、少し時間をいただき私のお話コーナー。私たちがスライドを制作した頃のこと、ＪＣＯ事故前後のこと、それ以前には近くにある原子力施設について知ろうとしなかった自分のこと、そして無力な自分を責めたこと。でも、事故の後に同じような思いの方とつながれたこと、勇気づけられたこと。そして今の東海村のこと。今回の村議選では脱原発を掲げた相沢一正さんが４年ぶりの再当選を果たしたこと。被害者の会が健康被害を訴えていた裁判は「原告棄却」となり、３月に東京高裁に控訴したことなど、いろいろと話す時間をいただきました。

ティータイムをはさみ、みんな輪になって、それぞれの思いをポツポツと話しはじめ、話の輪はゆるりと広がっていきました。最後には会場から、「お花見にも行かず、スライド会に来たけど、いろいろ話せて、聞けてよかったね。今宵は皆さん、夜桜ですね！」なんて言葉も飛び出し、和気あいあいと、公民館の閉館時間を気にしながらも、楽しく、深い時間をもつことができました。

当日のアンケート用紙に、ある若いお母さんは、「原発のこと、何も知らず、関心もなく過ごしてきたが、最近になって、『いろんなことがつながっている』ことに気がつき、子どもたちが、地球が、健康で、安心して生きていけるように、まず身の回りにおこっていることを知ろうと思っているところです」という、感想を書いてくれました。また環境問題に取り組んできた方からは、後日感想をいただきました。

「私たちの一見便利な生活には得体の知れない不安やリスクがある。マスコミも公教育も明らかにしない。今回のように、顔を見合わせながら、それぞれの生活や課題としていることを話し合い、納得のいかないことは何なのか、確認していくことが大切だと思う」。

気になっていた子どもたちの様子も添えられていました。

「きちんと受け止めていたのかなと思っていた子どもたちも、夜寝る前藪から棒に『原発って何？』と聞いてきた」というコメントは、情景が浮かぶようで、嬉しかったです。

先日、尾川さんにお願いしていた当日の写真が届きました。みんないい笑顔です。「また、きっとお会いしましょうね」と言ったばかりなのに、写真を見てると、もうすでになつかしい気持ちになってしまいます。「つながる」って、こういう気持ち？　さぁ…「ナージャ」のスライド、次はどの町の皆さんと「つながる」ことができるかしら？

スライド上映会のメンバー（筆者は後列右から３人目）

【追記】

グランドゼロ71号の「ナージャの輪通信」のコーナーで書かせていただいた、阿部初美さん演出の「**アトミック・サバイバー　～ワーニャの子どもたち**」が今年度、全国各地で上演されることになりました。全国の公共劇場の活動を支援する（財）「地域創造」の助成金支援を受けての上演です。

高知県立美術館９月20日（土）
川崎市アートセンター９月27～28日（土・日）
北海道深川町10月５日（日）
福島県いわき市10月12日（日）

使用済み核燃料からウランとプルトニウムを取り出し、再利用する核燃料サイクルの複雑な工程を再現する異色の演劇。その演劇を、日本の公共演劇が応援してくれるとのこと、希望がもてます。近くの方、是非応援して下さい。

ベラルーシの食卓

鶏ミンチの肉団子

丸太小屋の農家の板塀をくぐって、挨拶をする。中庭のベンチには、猫がゆったりと目をつぶって座っていた。庭のあちこちには、ニワトリが土の中の虫を食いつばんでいる。ナージャおばあちゃんは、毎朝、前掛けに卵をいっぱい入れて、小屋から出てくる。昼間は、あんなに自由にかけまわっているニワトリたちなのに、卵を産むのは決まった場所を守っているんだ。時間も決まっているのかもしれない。

最近、日本で地飼いの自然卵を売るお店で、烏骨鶏の卵が1個460円で売られていた。びっくり。貴重品なのだ。どんな味がするのだろう。何か、特別体にいいのだろうか。こうして、すべての物が、お金に置き換えられていく日本の生活に、私はヒリヒリとした違和感を持っている。

中庭の安堵感。ニワトリたちも自由だ。

＜材料＞

皮なし鶏のひき肉　550ｇ・小麦粉　150ｇ・牛乳または水　200cc
ラード　20ｇ・パン粉　大さじ2・マーガリン　50g・塩　少々

＜作りかた＞

1. ひき肉・小麦粉・牛乳・ラード・塩を合わせて、十分こねる。
2. 小さな球形にまるめて、上からパン粉を付ける。
3. マーガリンを熱して、厚めのフライパンで両面をいためる。
4. 付け合せに、インゲンとパプリカ等をソテーして添える。
5. マッシュルームを軽く炒め、サワークリームソースを作って、ラザニアをしいた上に肉団子をのせ、かけていただくのも、美味しい。

モスクワ便り

1980年にオリンピックが開催されたモスクワのスタジアムで、5月21日、ヨーロッパサッカー連盟チャンピオンリーグの最終戦が行われ、世界中からファンが集まった。とくにイギリスからは42,000人も。イングランドの人気チーム同士の決勝戦となったので、それぞれ21,000人ずつのファンが駆けつけたのだ。モスクワっ子は「ロシア人が、こんなに大勢のイギリス人を見たのは、19世紀のクリミア戦争以来だ」とはやしたてた。ファンの到着は5月19日から。ロシアの新大統領メドベージェフは、ビザ無しでロシアにきたイギリス人が、パスポートと試合のチケットを提示すれば入国できる特別な法令に署名した。ファンをそれぞれ別の空港に到着させ、お互いに入り交じって喧嘩にならないようにするために。選手もファンも、別のホテルに滞在させた。モスクワ警察は、スタジアム周辺の地下鉄駅、ファンが集まるレストランやバー周辺の警備を強化した。英会話ができる警官300人が抜擢され、他の警官には、短期英語講座が開かれた。イギリス人警官も、ロシアの警官をサポートするためにやってきた。

試合前に、ロシアの厳しい法律がイギリス人ファンを怒らせたという番組をやっていた。モスクワでは、酔っ払いは捕まると特別病院に入れられ、食事無しでベッドに鎖でつながれて冷水をかけられるというものだった。おそらくそれで、イギリス人はとても控えめになったのだろう。普通地下鉄でファンたちはひいきチームの旗を振って大声で叫ぶものだ。けれど私の見たイギリス人は、地下鉄駅の出口にエスカレーターで上がってくる途中遠慮がちに叫び、上まで来るとすぐに口を閉じた。たぶん、駅の入り口を見張っている警官に聞かれて捕まえられることを恐れたのだろう。それはとてもおかしな光景だった。何故なら、周りの人たちは皆好意的で、笑いながら一緒に声を上げようとしていたのだから。概して、この時のモスクワはとても明るい雰囲気だった。≪マンチェスター・ユナイテッド≫のファンは、赤いシャツを来て、自らを“赤軍”と呼び、赤の広場にチームの勝利を祈りに行った。

試合後の夜、街は眠らなかった。普段、モスクワの地下鉄は、午前1時まで動いている。しかしこの日は、朝4時まで延長された。一晩中、勝利を祝った者。そして痛恨の悲しみで、バーで飲む≪チェルシー≫ファン……。

イリーナ・ニコラエワ（モスクワ事務局）

NO.32

かかわりの内側

宮尾 彰

君の位置からの　それが
最もすぐれた姿勢である

石原　吉郎

ある朝のこと、出勤途中の車窓から歩道を歩く二人の子どもの姿が目に止まりました。小学校高学年の女の子が、後ろを振り返り振り返り、ゆっくりと歩いています。その後方二十メートル程の曲がり角に、小さな弟がブロック塀から顔だけ出して、お姉ちゃんの様子をうかがっています。

お姉ちゃんは、「仕方がないな」という顔で数歩弟の方へ歩み寄ります。すると彼は、一歩踏み出そうとして止め、またもや塀の陰に隠れてしまいました。

「ふん。もう知らない！」お姉ちゃんはきびすを返すと学校の方に向かってすたすたと早足で歩き出しました。

かわいそうな弟は、下を向いて逡巡（しゅんじゅん）している様子でした。

信号待ちに垣間見た、兄弟喧嘩の一幕です。

しばらくの間、私はアクセルを踏みながら、『あの後、二人はどうしただろうか？』と考えていました。

それぞれが、精一杯の迷いや動揺に耐えた末に、やがては謝罪と和解を経験したのではないでしょうか。

私はその時、この小さな二人の姿に、かかわりにおける人間の「位置」というものを示されたように思いました。その場において待った無しの、誰にも代わってもらうことのできない、相手に対する責任をそこに感じたのです。

元来、私たちの生活が、こうした些細なかかわりの積み重ねなのです。相手の眼の前に立つ時、私はこの世界の内に唯一無二の「位置」を占めています。

ところが最近、このかかわりにおける「位置」が消失してしまったかのような事態が起こっています。

「誰でもよかった」

これは、自らの生活に応答すべき相手を誰一人持たない状況においてしか生まれ得ない発言ではないでしょうか。

この言葉が、特定の人物に限らず、私たち誰もの生活の内に孕（はら）まれている危険を象徴しているように思われます。

※

「日本に帰国するたびに、なんだか風が変わっているなあ、と感じます。それも良くないほうへ」

こう語るのは、ペシャワール会の中村哲医師です。

年の十ヶ月をアフガニスタンに過ごし、現地で用水路を拓（ひら）く仕事に従事されています。先日、帰国中の貴重な時間をさいて行われた講演会で、初めてその肉声に触れました。

背広にネクタイを締めた壇上のその人は「土方焼け」の黒い顔をした小柄なおじさんでした。「先生」等と遠巻きにお呼びするよりも「親方！」と呼び掛けるのがふさわしい。

二時間におよび、ただひたすら現地で今何が起き、日々どんな作業が進められているかを語られました。

会の終わり近く、司会者がまとめに入りました。

「先生は、これまで長年にわたり国際貢献を果たされて来られたわけですが…」

それを受けて、中村さんは即座にこう答えました。

「私は自分が生まれた九州と東アフガンしか知りません」

「国際貢献」という言葉には具体的な対象が無いのです。

かかわりの内側に立つ時、私たちの発する言葉はより質量を増します。氏の現地での営みが、人間の生死を分ける境界に接しているのであれば、それは尚のことです。

迸（ほとばし）る血流のような言葉を身に浴びながら、客席の私は自分の日常がすっかり抽象化されているのを痛感していました。

パソコンを前に右手を少し動かせば、次から次へと世界中の情報が飛び込んで来ます。けれどもその時、他ならぬ私の位置と責任はすっぽりと抜け落ちているのです。

АНЕКДОТ

◆Летит самолет «Аэрофлота». Стюардесса спрашивает пассажира:
- Кушать будете?
- А какой у меня выбор?
- Да или нет!

◆В Японии изобрели робота, который ловит воров.
- В Японии за 5 минут поймали 100 воров.
- В Америке за 5 минут поймали 200 воров.
- В России за 5 минут кто-то украл робота.

◆- Молодой человек, - сердится отец, - вы обещали привести мою дочь домой в 12 часов. Сейчас 3 и вообще это не моя дочь.

◆В высокогорном ауле мальчик подходит к старику и спрашивает:
- Дедушка, вам сколько лет?
- Сто пятьдесят восемь.
- Ого! А вы пьете, курите?
- Конечно, а то вообще никогда не умру!

◆С целью удовлетворить потребности рынков США и Европы, Китай наладил выпуск футболок с надписью "Free Tibet".

ジーマの

ロシア小話

◆アエロフロートの飛行機が飛んでいる。
スチュワーデスはお客さんに尋ねる
「お食事を召し上がりますか？」
「こちらにはどんなチョイスがありますか？」
「はいか、いいえか」

◆日本で泥棒を捕まえるロボットが発明された。
日本では5分間で100人の泥棒が捕まった
アメリカでは5分間で200人の泥棒が捕まった。
ロシアでは5分間でロボットが盗まれた。

◆嫁の父は若い男に言った。
「あなたは私の娘を夜12時まで連れ戻すことを約束したのに、もう午前3時だし、あなたと一緒に来た人は決して私の娘じゃない」

◆山岳地帯の長寿村に男の子がやって来て、お爺さんに尋ねた。
「お爺さん、おいくつですか？」
「158歳です」
「へー！　お爺さんはタバコとアルコールをのみますか？」
「勿論ですよ。でないと、いつまでも死ねませんから」

◆アメリカとヨーロッパの需要を満たすために、中国は "Free Tibet" と書かれたTシャツの大量生産をした。

――ストレリツォフ・ドミートリさんよりのアネクドート――

振替用紙のメッセージから

◎開戦から5年、どんどん治安が悪くなる一方です。子供達に平和を！そして希望を！

◎暖かくなって、頭も身体も動くようになりました。枯れ色の庭も次々と花が咲き始め、椿、ぼけ、水仙、クリスマスローズ、ムスカリ、なんとも美しく目をみはります。人間も自然界の一員だということが身に沁み、やるべきことを一つ一つやっていけること、手足が動くこと、ありがたいです。

◎グランドゼロ75春号ご送付ありがとうございました。

年々近くの公園の中も道路脇も桜の樹が育って、うすピンクの花が私達を楽しませ、優しい心にしてくれます。地震ではなく花を！という言葉が身に沁み、世界中風土にあって花が咲き賑わう日々をめざして、小さくても思いや行いを積み重ねていこうとお花にお礼を言いました。

◎子どもたちが笑顔でつながっていきますように。

◎鎌田先生の本と出会えて感謝！健康で細々でも末永く協力させて頂けることを願って、よろしくお願いします。

◎春、黄色い帽子をかぶった新1年生が元気に登校していますが世界には病気と闘っている子供達が多くいることを思うと心が痛みます。

◎保育器2台無事購入できましたでしょうか？。月からの美しい「地球の画」をみてあの中で皆、仲良く暮らしたいと切に思います。

◎イラクの皆さん、負けないで下さい。私達は皆さんと共にあります!!ファイト!!

◎4・26を忘れずに、放射能の怖さを忘れず、なおかつ少しずつ伝えていきたいと思っています。

◎バレンタインコンサートに参加できず残念でした。ぜひ又企画して下さい。

◎初めて寄付させて頂きます。少しでも何かのお役に立て、世界の百の村が平和で幸福でありますように、心より願っています。

◎4月26日には、ベラルーシの人達に心を寄せて過ごそうと思います。万感の想いを込めて…

◎22年目の4・26を明日に控えて、いつもこの日を心に刻んでおくための、一灯です。

◎みなさま、いつもお世話様です。4月19日「みえない雲」上映会を致しました。カンパと収益金です。

◎今年も4月26日京都で集いをもち、約百名が集まりました。わずかですがチェルノブイリの若者たちへのカンパです。

◎ソフトバンク横手駅前店からの応援です。一人でも多くの子どもたちに救いの手がさしのべられることを願っています。

◎長女を妊娠中、臨月の時（5月14日に出産）事故で、22年たった今もあの時のことが忘れられません。遠い外国の事で済まされないと思いました。

◎CD「ひまわり」に癒され心温まりました。

◎子どもさんから届くクリスマス葉書は心に沁みます。事務局のお仕事を感謝しております。

新婚旅行でイランに行く

本当はどうかを、自分の目で

国井　真波

シラーズにて、マントー着用の国井さん

私は4月に、新婚旅行でイランに行ってきました。

そう言うと多くの人に、驚かれます。

「旦那さんもイランに興味あるの？」

「どこが見るところでもあるの？」

「危なくないの？」

イランというと、核兵器開発が疑われ、アフマディネジャド大統領の発言が物議を醸し「テロリスト」だとか「不法滞在者」だとか、悪いイメージがつきまといます。

イスラムに関心がある私と夫にとって、それはとても残念なことで、「じゃあ、本当はどうなのか、自分たちで行って見てこよう！」そんな思いから、新婚旅行という名目でのイラン行きとなりました。

全行程8日間で、

・シーラーズ（世界遺産ペルセポリスがある都市）

・イスファファン（イラン最大のオアシス都市で、世界遺産のイマーム広場が有名）

・テヘラン（首都）

という順序で訪れました。

実際に行ってみないとわからないこと、初めて知ったことなど、内容盛りだくさんの旅でした。

是非みなさんにもその話を聞いていただきたいと思います。

平和への第一歩

私は中東に関わるようになってから、女性が被るスカーフについていろいろと考えるようになりました。イスラムでは毎週金曜日が休日で、金曜礼拝が行われるのですが、イスファファンという都市のイマーム広場で、上から下まで黒いマントーを着ている女性たちを眺めながら、思いをめぐらせていました。ちなみに普段スカーフしか被らない女性でも、モスクに礼拝に行くときは、マントーを着用しなければなりません。

9・11後、アメリカがアフガニスタンの空爆を開始するときにファーストレディが、「ブルカ（スカーフ）を取って、アフガニスタンの女性を開放する」というような発言をしました。う～ん、なんだかなあ～…確かにその後、ブルカを被らない女性たちもいますが、しかし自分の意志で、ブルカを脱がない女性たちもいます。「恥ずかしいからミニスカートは履かない」という女性に対して、私たちは、「履きなさい」と強要するでしょうか？「恥ずかしい」と感じる部分は人によって違います。それと同様に、「人前で顔や髪の毛を見せるのが恥ずかしい」という女性に対して、「ブルカを被るのは辞めなさい」と言えるでしょうか？なぜブルカを「イスラムの、悪の象徴」のように、みなすのでしょうかね？？？

私はイランでスカーフを被ったとき、頭がかゆくなるし、邪魔だなあ～と思いました。でも、イランって砂漠の国で乾燥していて、夏は暑いし、大気汚染（特にテヘラン）が凄いんです。そんな状況下で、女性がスカーフを被らないでいると、髪の毛はパサツキ、茶色に焼け、場合によっては、頭のてっぺんがハゲてしまいます。被ることで生じるデメリットよりメリットのほうが大きいのかもしれない。そういうことも知らずに、頭から否定するのはどうなんでしょう？

ちなみに、1979年のイスラム革命以前、イラン女性の服装は自由でした。逆に、「イスラム風服装の禁止」という法律があったほどで、1979年以前は、欧米風の服装と、イスラム風の服装が混在したそうです。自分と違うものを否定したくなるのは、未知のものに対する「恐れ」から来ると思います。まず、相手を知ること。どんなに些細なことでもいいから、相手を知ろうとすること。これが、平和の第一歩なのではないかと思います。

政治と宗教の話は…

普通一般的に「政治と宗教の話は、あまりしない」のがスマートなコミュニケーションだと言われていますし、特に初対面では、そんな話はしないと思います。これがイスラム圏や軍事政権の国を訪れると顕著で、どんなに親しく付き合ってる

ムスリムでも、その人がシーア派かスンニ派か、知らされることはないし（もちろん、こちらから聞く話でもない）、ビルマ（ミャンマー）で、アウンサンスーチーさんの名前を出すだけで、「あの外国人は反体制派だ」と、密告されます。また、イスラム圏では、写真を撮られるのをイヤがる女性たちはたくさんいますし、多くの難民は、写真はおろか、実名を明かさない人もいます。なので、今回イランの街中で写真を撮るのは、緊張しました。ジャーナリストであれば、そんな中でも命がけで写真を撮るでしょう。実際、２００３年にカナダ人ジャーナリストが、デモが起きたテヘランの刑務所の写真を撮って秘密警察に捕まり、殺されたという話もあります。世界には、日本にいるときと同じような感覚で、話をしたり写真を撮ったりできない場所がたくさんあるのです。特にイランは、街中で立っている警察の数が多いですし、高速道路にもウヨウヨいました。もちろん、長い銃を所持しています。

そんな中、不思議な出会いが、いくつかあったのです。

シラーズにある世界遺産ペルセポリス

イラン航空の中で

イランを悩ませてる問題の一つに、「飛行機の老朽化」があるそうです。テヘランで、あるイラン人に、「何処の航空会社で来たの？」と聞かれたのですが、「イラン航空に乗らなくて正解だったね」と。確

イスファファンの休日風景

かに国際線は、エミレーツを利用したのですが、イラン国内の移動は、イラン航空を利用。イラン航空の多くの機体は、使用年数が約30年で、そろそろ買い換えたいとのこと。しかし当然アメリカは売ってくれないし、アメリカがヨーロッパに根回ししているため、欧州で、イランに飛行機を売ってくれる国もないそうです。

シラーズからイスファファンに向かう飛行機の中で、私の隣に座った年配の男性イラン人。かなりおしゃべりな人で、私たちが日本人だと知ると、英語でとにかく話しかけてきたのです。ビックリだったのは会話のしょっぱなから、「アメリカはイランの敵」というセリフ…私は自分の聴き間違いだと思い、何度も聞きなおしてしまいました。「自分は、イランの安全保障に関わっていて（対アメリカ）、研究をしているんだ」とか、「9・11はアメリカの自作自演だ」とか。そんな話を熱心にしていました。私は思わず、「この人、秘密警察だったり!?」と、警戒してしまい、意見を求められても、無難なことしか言いませんでした。ただこの男性、「イスラムをもっと勉強して欲しい」と言っていたのは、私も共感でした。

9・11以来、イスラムと言えば、「怖い」「危険」「テロリスト」という、悪いイメージがまとわりついていますが、「そうじゃないんだよ」ということを、たくさんの人に知ってもらいたいと思うのです。

いろんな、とらえかた①

同じ国に住んでいる者同士でも、育った環境や、現在の生活によって、異なった考え方をもつことは、日本人でも同じことですよね。イランのシラーズで出会ったイラン人は、現政権に怒りを感じている人でした。「アフマディネジャドの締め付けは厳しすぎる！」「ハタミの頃は、もっと緩やかだった！」と。そして、「イランの三大悪は、①イスラム②石油③ガス」と言っていて、じゃあ、彼はムスリムじゃないのか？というと、シーア派である父とスンナ派である母から生まれたので、スンナ派に理解を示しているムスリムだよ、と言って笑っていました。「三大悪」の第一位にイスラムをあげてるということは、イスラム革命前の時代が良かったのか？　というとそうでもなく、「久しぶりに会った甥っ子が、バーガーキングの帽子を被っていたので、オレはそれを投げ捨てたんだ。近くに警察がいたし、何よりもオレが「キング」というものにアレルギーがあるんだ」と言って、これまた笑っていました。そして、イスラム教が禁止しているアルコール。緩やかな国では、売っていますし、飲むこともできます。

イスラム教の国にも、外国人観光客は来ますし、クリスチャンも住んでいますからね。しかしイランでは、アルコールを購入することができません。当然持ち込みも禁止です。しかし！　シラーズで見た、ブドウ畑!!　シラーズは世界でも有名なブドウの産地で、イスラム革命以後、アルコールが禁止になった今でも、ブドウを海外に輸出しているそうです。私はワインのことはよく分からないのですが、「シラーズワイン」とは、イランの街・シラーズから付けられたものらしいですよ。でも…折角、ぶどうを生産しているのに、ただ輸出しているだけ…？　そのイラン人曰く、「友人のクリスチャンの家に集まって、密室で飲んでるよ」とのこと。映画「ペルセポリス」にも描かれていましたが、革命以後も、秘密警察にばれないように密室で楽しむ、というのは、よくあることなのかもしれません。特にシラーズは、世界遺産ペルセポリスで有名な街とは言っても、やはり過疎化が進んだ小さな街です。仕事がなく、若者は大都市に出て行ってしまう。イランには、石油産油国という大きな武器があるため、世界遺産には目もくれず、遺跡を売りにして観光業を活性化させようという気が、あまりみられないそうす。石油の恩恵を受けるのは、大都市の一部の人たちだけ。そんな中で生活していると、現体制批判も出てくるし、お酒だって飲みたくなるでしょうね。（いやいや、これは信仰心の問題か!?）でも、テヘランで出会ったイラン人は、また違った話を聞かせてくれたのです。

いろんな、とらえかた②

テヘランで出会ったイラン人は、こんなことを言っていました。

「イランは豊かな土地です。石油やガスが取れて、農作物も豊富です。カスピ海の方ではお米が取れて、果物や野菜もたくさん。豊かであることは、イランにとって素晴らしいことです」

イランの主食は、お米とパンです。レストランなどでご飯が出てくるときは、ご飯の中でバターが溶けていて、サフランが乗っています。

イスファファンのオアシス

干しブドウが乗って出てくることもあります。さすが、ブドウの産地!!

街の郊外を走ると、小麦畑があちこちに出現。緑豊かな土地が広がります。そして、その合間に時々現れる、菜の花畑。菜の花からは、菜種油を取るわけですが、小麦と菜の花の二毛作が、主流だそうです。

仕事がなく過疎化が進むイランと、資源豊かなイラン。どちらも真実で、イランの現状を現しているのだと思います。物事を見るときは、いろんな側面から情報を得ること。どんな場所にも、名前を持った、一人一人の生活が存在すること。それらのことを忘れてはいけないんだと思います。

イスファファンのバザールには
大きなホメイニの肖像が

その国に行って、はじめてわかること

冒頭にも述べたように、イランは様々な問題を抱えています。しかし実際イランに行ってみて、イランの美しさには驚かされました。イランは砂漠の国で、各都市がオアシスになっていますが、イラン最大のオアシス都市は、イスファファン。街のいたるところには、わっさわっさと、緑が生い茂っています。そして、水に溢れています。金曜日の休日には、川に家族連れが溢れています。そして、間欠泉のような噴水。イマーム広場でも、噴水が涼し気です。シラーズという都市でも、キレイな花々を街中で見ることができます。

私はイランを旅して、「お花や緑が好きな人たちに、悪い人はいないハズ」そんな風に感じました。もちろん、国際情勢はそんなに単純なものじゃありませんし、どこの国にだって悪人はいます。でも、そう感じた自分の感覚を私は大事にしたいし、それを多くの人に伝えたいと思うのです。そしてこんなに美しい国を戦争で失いたくありません。イランで交流を持った人たちは、面白い方たちばかりでした。彼らの上に、爆弾の雨を降らせたくありません。これはイランに限ったことではありません。私は今まで30以上の国々を訪れましたが、どこに行っても、同じようなことを感じます。最近まで拒絶反応を起こしていた中国にでさえ、旅行したとたんに愛着を感じたくらいです。とにかく、その国に行って見てみよう。話をして、ご飯を食べて、いろんな経験をしよう。そして、そのことを多くの人たちに伝えていきたいと思います。

会員さんを訪ねて

フストレーチャ：出会い

ВСТРЕЧА

♪お楽しみはこれから♪

グランドゼロの編集では、73号から長野市在住の寺島仁美さんに校正をお願いしています。字句の間違いだけでなく、文章の読みやすさ、固有名詞や団体の正式名称なども、ネットや書籍を当たって丁寧に調べ、適切な指摘をして下さいます。校正メールにちょこっとつけてくださるおしゃべりがまた楽しい。長野の出版社・オフィスエムの校正の仕事をされている縁で紹介して頂いたので、てっきり出版関係の方だと思っていたら、本業は音楽関係の方だそうです。ご自宅でピアノを教えるだけでなく、デイサービスのお年寄りや保育園の子ども達の歌の伴奏、ヴァイオリンやフルート、歌曲にコーラスグループの伴奏と駆け回っているらしい。

一度お話を聞きたくて梅雨の晴れ間の一日、長野のお宅に伺い、午後からの小布施町千年樹の里健康福祉センターでの「うたごえ」出前ステージも見学させていただくお願いをしました。

電話で教えて頂いた通り、寺島家は長野大通りのビルとマンションの間の不思議なスペースにぽっかりとありました。お宅の前でにこにこ手を振ってくださる仁美さんを発見して一安心。手作りの梅サワーが運転の緊張を吹き飛ばしてくれました。

まずはとびきり個性的な寺島ご一家の紹介を。

電気機械の制御が専門のご主人は、旅と物作りが大好きで、地下の工房に籠もっては、木工・溶接など、バザーのクレープを焼くためのクレープパンからトンボまで何でも作ってしまう人。ほとんどの週末はお出かけ、「帰る家があるから、ボクはまた旅にでるのサ…」なんていいながら「出たきり老人」になるのが、近い将来の夢だとか。

上の娘さん和音（かずね）さん、お名前通りお母さんと同じピアノをものし、お母さんを追い抜いて、小学生の時に盲導犬候補犬の育成ボランティアの記録作文が「2年1組サティルン」という本になって出版されました。手作りマンションとして有名な『沢田マンション』に住みたくて、高知大学に入り、合気道と軽音とダンス部とに所属して、今では「よさこい」チームの幹部。

次女の明里（あかり）さんはヴァイオリンと歌が大好きな高2、旅に出る時もヴァイオリン持参、興が乗ると辻ヴァイオリン弾きになるそうです。

ご主人が世界中に友達を作るので、お宅には年に幾人もの突然の見知らぬ来客があるそうです。そんな時ご主人の一声で始まるホームコンサートは仁美さんと娘さんの演奏ですばらしく盛り上がるそうです。

「ご主人は何を演奏するの？」

「夫はほらを吹くのよ～」

演奏を大いに盛り上げるのが、ご主人の特技なのでしょう。

仁美さんのお父さんは長野県佐久市の御出身ですが、仁美さんは名古屋生まれの名古屋育ち、音楽で結ばれたご両親の期待通り、小さい時からピアノ一筋、小学校卒業の頃には大学の先生について勉強、高校も音楽科、ピアノを学ぶために大学に進みます。

でも仁美さんの「愛」はじつはピアノではなく「本」にあったのです。受験期にも課題曲を暗譜すると、譜面台には楽譜ではなく本を置き、手と耳はピアノ、眼は本を追うという離れ技を駆使していたらしい…。

手作りパッチワークの前で母親コーラスの演奏会のお話

ピアノより本が好きだった仁美さんですが、本を読むことと自分の将来が結びつかず、ピアノを弾いていれば両親も喜び、周りもすごいと言ってくれるので、引かれたレールの上になんとなくのっかっていたといいます。

ピアノは毎日の練習が欠かせないので、家族との2、3日の旅行しか経験がありませんでした。広い世界を知りたくて、大学を卒業して初めて一人で

1ヶ月の海外旅行をしました。せっかくユースホステルの会員になったからと、その年の夏には東北を旅します。その東北の旅で夫と出会ったの。

生まれも育ちも長野市の旅が大好きな寺島栄次郎さんは、独身時代には自転車を担いで、日本全国はもちろん、横浜からナホトカ航路～シベリア鉄道でヨーロッパそしてアメリカと、世界を旅していました。ピアノの世界しか知らなかった箱入りの仁美さんは、広い世界を見ている栄次郎さんのお話にすっかり「ぼーっと」なってしまい、知り合って半年、24歳で結婚して長野に住むようになります。

結婚前にはピアノの生徒も大勢いて、伴奏の仕事もかなりあったのですが、自分には演奏家になるほどの熱意と才能もないと感じて、漠然と将来はお母さんかな…とも思っていたので、生徒さんや周りは驚きましたが、あっさりと長野に嫁いだのです。

結婚して子育てをするようになると、ああ、こういう世界もあったのかと発見の日々。子どもが通う幼稚園の母の会が、とても活発なサークル活動をしていました。役員会ではみんなが手作りのお菓子や漬け物を持参して、のべつ幕無しお茶を飲むという信州独特の習慣にびっくりしながら、パッチワークや読書会のサークルに参加し、コーラスグループを立ち上げました。このコーラスグループが今も続いて、今年は15周年記念コンサートを開きます。2ヶ月に1度、幼稚園のお誕生会でも歌っています。新しく入園したお母さんも交えて、多い時は50人、現在は30人の仲間がいて、孫ができた人から妊娠中の人まで年齢も様々です。練習は毎週1回、仕事で昼間の練習に出られない仲間には練習の様子を録音したCDを渡して自己レッスン。そんなにしても一緒に歌いたいという仲間の気持ちのつながりで会が続いています。子どもの小さいうちは子育ての悩み、不登校の相談から、最近では親の介護の話、将来は共同墓地でも作ろうか、などと話しています。団長の私はコーラスの伴奏だけでなく、練習会場の手配や会員さんへの連絡など雑用もなかなか忙しいのよ。

仁美さんはインターネットが普及する以前からニフティー通信の会員になり、鳥見フォーラム（バードウォッチング）や園芸フォーラムで「れみどり」

公演前の音合わせリハーサル

さんとして活躍、寺島家のお庭はNHK趣味の園芸で紹介されたこともあるそうです。でも裏にマンションが建ってしまってから、日当たりが悪くなり、せっかく丹誠した薔薇もハーブも元気をなくして、仁美さんの意欲もそがれてしまい、玄関に咲く可愛いオールドローズに面影をとどめるだけになってしまいました。でもニフティー時代のパソコンのスキルは、在宅での校正の仕事に活かされています。

もう一つ17年間も続けているのが出前コンサート。

歌声喫茶「ともしび」長野店で20年近くも歌唱指導や伴奏をやっていた神谷ありこさんという方がいます。仁美さんのご主人がともしびのお客さんだったので、仁美さんもたまにお店に行くこともありました。神谷さんは信州大学在学中に「うたごえ」にはまり、2000年にお店を閉じてからは、うたごえの出前を仕事にしています。

17年前、神谷さんのお父さんががんで亡くなり、時を同じくして仁美さんのお母さんががんの宣告を受け、3ヶ月後には亡くなってしまいます。このことが年齢も近く同じ名古屋出身で共通点も多かった神谷さんと仁美さんとの気持ちを、ぐっと近づけます。

神谷さんから、

「仁美さん、子どもは小さいけど、昼間は暇だろうから、一緒に出前コンサートしない？」と誘われます。

以来17年、多い年は年間100公演の出前を続けてきました。お年寄りや子どもと一緒に歌い、手遊びをし、県内は勿論、呼んでくれれば県外にも出かけます。数年前新潟県刈羽町にも出前に呼ばれました。原発の交付金で建てられたけれど、様々な軋轢からほとんど使われていなかった豪華なホールでのうたごえには、たくさんの参加者があり、いろんな反響を残したそうです。

この出前コンサートはいわゆる「ボランティア」ではなく、主催者の予算によって、たとえミカン3個でもいいから必ず報酬を頂きます。同じ仕事をする仲間の報酬や音楽文化の価値についても考えたいのです。でも安くても高くても私たちのステージの内容は変わらないのですが…。

機材は全て自前で用意して、コンセント一つあればどこへでも出かけます。ある学校に呼ばれた時は、体育館にピアノがあるというので蓋を開けたら鍵盤に蜘蛛の巣がはっていたり、ステージ衣装に着替える場所がなくて、部屋の隅で着替えたり。「先生」と言われてお供がつき、レッスンと言えばお金が動くクラシックの世界では想像もできないことがいっぱいありました。でもこういう経験は誰でもできることではないのですから、面白がった方が得です。けれど、もし、ずーっと

師事していたピアノの先生の視線を感じるような場所でだったら、こういううたごえのような仕事はできなかったかもしれません。私も神谷さんも長野が地元ではなく、しがらみから自由だったことも良かったのでしょうね。

本の世界にかかわるようになったのは、母が亡くなったことが大きいのです。核家族で育ち、人が老いることや入院や死を身近に経験してこなかったので、何となく親はいつまでも生きているような気がしていました。健康に人一倍気をつけていた母ががんと診断されて3ヶ月、58歳であっという間に亡くなったショックはとても大きく、元気なうちに死について学んでおかなければと、鎌田先生の本など死に関する本ばかり読みあさりました。友達に誘われた勉強会で、オフィスエムが出していた内藤いづみ著の「あした野原に出てみよう」という本にも出会いました。内藤先生の本はほんとうに素晴らしく、偶然オフィスエムが家のすぐそばだったので、友達と訪ねて行きました。熟読のあまりこの本の誤植までいくつか見つけていた私と友達は、「もしまた内藤先生の本を作る時は、ぜひ手伝わせて下さい！」と買って出たのが、校正の仕事をするきっかけだったのです。

オフィスエムに話がたどり着いたところで、そろそろ小布施に出発の時間が来ました。仁美さんの車に便乗させていただき、千年樹の里健康福祉センターに向かいます。

私たちが到着した時には、神谷さんはお手伝いの高校生の助手と一緒に機器のセッティングをほぼ終えていました。後から到着したクラシックの歌い手宮澤美幸さんを交えて、リハーサル。ケーブルが不調で音が割れるので、あちこちを調整。機器のセッティングが一番の仕事だそうです。

お弁当を頂いて、一休みして、いよいよ本番です。

今日はこの施設の1年1度の大イベント「はつらつお笑い演芸会」。第1回のイベントで落語家を呼んだので、こういうタイトルになり、2回目に呼ばれた神谷さんと仁美さんのステージが好評で、毎年の公演になったのに、なぜかタイトルは「はつらつお笑い演芸会」…。

デイサービスのお年寄りや車椅子の方、近所から連れ立ってやってきたお元気そうなおばあちゃんおじいちゃんで、広いホールはすっかり満員です。

最初は職員によるぼけ防止の寸劇、衣装やメークも本格的でなかなか力が入っています。さっき事務室で会った若い男性職員が、ばっちりメークのヤンキー娘（?）に変身して笑いをとります。職員扮する老人達が、「ぼけ防止には笑って歌うせうのが一番だねか、みんなして神谷さんのコンサートに行かず」で幕になりいよいよコンサートが始まります。

職員による寸劇はなかなか本格的

仁美さんの軽やかな伴奏にのって神谷さんが登場、元気あふれる歌とトークが始まりました。「私が神谷で、伴奏が寺島、今日は神も仏もいるからねぇ～、いいことあるよ！」

神谷さんがわかせた後、美幸さんが登場してがらりと違う歌声に会場がしーんとなります。美幸さんの唄にちょっと襟を正した会場に神谷さんが再び登場。美幸さんに「むすんでひらいて」をオペラの歌い方で歌って、というぶっつけの注文。幼稚園の子どものお母さんだという美幸さんが、「子どもに受けるかもしれないから、今度家でもやってみます」と面白がりながら歌い出します。美幸さんにかかると「むすんでひらいて」が格調高いオペラに聞こえます。

左から美幸さん、寺島さん、神谷さん

オペラ「むすんで開いて」の次は「て、で」の言葉を抜いた「て抜き版・むすんでひらいて」。「むすん〇、ひらい〇、」まではセーフでも思わず「〇をうって」で失敗して大笑いの会場。リクエストの曲も飛び出して客席とステージが一緒に盛り上がるうちにあっという間の1時間半が過ぎて、今日のステージ終了。

私もスタッフと一緒に来て下さったおじいちゃんおばあちゃんにお礼を言いながら出口でお見送り。神谷さん達

はまた来てね、と言うお年寄りから熱い握手や抱擁を受けています。こういう交流があるので、出前コンサートは1度やるとやみつきになるのだそうです。

うたごえ公演での神谷さんと仁美さんのあうんの呼吸、ちょっと色合いの違うゲストをはさむ絶妙のタイミング、改めて17年続いた歴史を感じました。帰りの車の中でもそんなお話になります。

幼い明里ちゃんを幼稚園の体育マットの上に寝かして公演した時、演奏が終わって「さぁおやつ」という時にちゃんとむくっと起きてきたお話、「おはなし貼り絵」のパネルシアター公演で、神谷さんが子ども達に、

「さぁ次に出てくるのは何だろう?」

というクイズを出すと、答えを知っている明里ちゃんが一番前の席で

「はあい、からす!!」

と答えをばらしてしまったという逸話。

今まで一度も公演に穴をあけることなく、17年も続けられたのは、家族の応援と神谷さんのおおらかさ、そして家族も含めて健康でいられたからだと振り返ります。

「大きくなったら何になりたい?」

という問いに

「ありこさんになりたぁ〜い!」

と答えていた和音さんは、今ではありこさんにではなく「お医者さん」になるために医学部で学んでいます。小さい頃から盲導犬の世話をしたり、何か人の役に立ちたいと言っていた娘さんの選択でした。

仁美さんはお母さんの3ヶ月の闘病中、幼い子どもを連れて長野と名古屋を往復して看病に追われながら、お母さんは死なないという根拠の無い希望にしがみついていました。お母さんが亡くなった後、お母さんの死を受け入れられず、本を読むことで残された自分の答えを見つけようとしました。

音楽の道もあった和音さんが医学部を選んだのは、お母さんのまわりにあった本の影響も大きかった、そう娘さんから聞いた時は、とても嬉しかったそうです…。

最後に過密スケジュールをにこにここなす秘訣を仁美さんにこっそり教えて頂きました。

それは、

「やって楽しいことだけやる!」…

たくさん読んだ「死ぬ本」で、結局「よく死ぬことは、よく生きることなんだ」と気づいて、生き方が変わったの。それと、ある時、黒柳徹子さんがこんなことを言ってたの。

大きな病気をした後に医者に

「もう二度と病気はしたくないのですけど…」

と言ったら、医者が

「それはね黒柳さん、やりたくないことは、やらないことです、やって楽しいことだけやったら、病気はしない」

それ以来、やりたくないことはやらず、やって楽しいことだけやるようにしたら、一度も病気してないのよ」

ああ、これかぁって、私もすごく共感できたの。

楽しいことだけやってるから続く。ちょっといやだなって思っても、そこに楽しみを見つけて、トータルとして楽しんでしまう。そしてまわりも巻き込んで、まわりも楽しんでくれたらちょっとがんばれて、続けていけるでしょ。

いろんなことに興味があって手を出しても、私にはいつも音楽というよりどころがあります。ほっておくと二足どころか百足でもわらじをはいてしまう私に、おまえの重心はここだよ、と、両親が音楽を与えてくれたことに感謝しています。

悔いなく好きなことを楽しみながら、関わったすべての人や事柄が、どこかで楽しくつながっていくのが理想ですね。

「お楽しみはまだまだこれから」かもしれませんね!

お話に演奏にとても楽しい長野での一日、おみやげに台所に鍋を並べ、ご夫妻が夜なべで作った特製杏ジャムを頂き、帰路につきました。

寺島さん、これからも音楽を芯にした「まだまだこれから」を楽しみにしています。

仁美さんが立ち上げたコーラスグループのステージ、ドレスで伴奏の仁美さん!

こんにちは！

Здравствуйте!

収納の達人
森たかのさん登場！

事務用品、販売物の在庫の整理整頓も森さんがきっちり！

初夏の候、どうぞ、松本事務局にお立ち寄りください。倉庫のようだったゲストルームは、こざっぱりしたビジネスホテルに、隣室の文字通り物置は、みごとな資材置き場に整理されました。これらは、すべて、今年1月から事務局に登場した森たかのさんなくしては、起こりえない変身でした。森さんは〝お宝発掘名人〟です。机の引き出しや物置の中に眠っていた貴重な資料や貝原浩さんの筆ペン画が、目を覚ましてくれました。横のものを縦にすることで、こんなに使いやすくなるなんて。森さんは〝整理の達人〟一級認定証が歩いている感があります。

今年も、大成功のＪＩＭ―ＮＥＴチョコキャンペーンは、森さんの発送作業の手際よさに支えられました。全国の皆さんに、なんと３７０００パックのチョコを買っていただきました。イラクの医薬品購入に使わせていただきます。また、来年のキャンペーンは、天井知らずで伸びるのではないか、と思わず期待してしまいます。

「森さん、来年はどのくらいいくと思う？」

「10万は行くんじゃあないですか」

あんなに忙しかったのに、森さんの中には、まだまだ余裕があったのですね。

森さんについて語れば、まだまだ続き、終わりそうにありません。どうぞ、事務局でお会いしましょう。（神谷）

ベラルーシの食卓を囲んで

ゴメリ医科大学から日本に来るカーチャ（右）さんとジーマさん

8月1日～12日、ベラルーシ、ゴメリ医科大学から、学生のドミートリー・クラウチャンカさんが、松本にやってきます。

彼は、5年前、白血病にかかりました。ミンスクの小児血液がんセンターで、オリガ先生の治療を受けたそうです。今、ジーマ（ドミートリーの愛称）は、医師をめざして勉強しています。来松のきっかけは、長崎・ヒバクシャ医療国際協力会の招きによるものです。短期間で、まだ学生のジーマには、日本の医療現場の見学プログラムを準備しています。

ジーマからベラルーシの話を聞く会を行ないますので、ベラルーシ家庭料理に舌鼓を打ちながら、ジーマとの歓談をお楽しみください。

8月6日（水）　10時～12時30分
松本中央公民館（Ｍウィング）４Ｆ　調理実習室
参加費　３００円
エプロンをご持参ください。
申し込み：電話（0263-46-4218）・ＪＣＦ事務局

こんにちは！

たぁくらたぁ
発行人　野池元基
定価：400 円（税込・送料別）
◎定期購読申し込み
〒 380-0802　長野市上松城東ビル３Ｆ
オフィスエム
TEL 026-237-8100　FAX 026-237-8103
Emal　emu@avis.ne.jp
URL　http://www.avis.ne.jp/~emu/

善光寺が、聖火リレー出発式の会場を辞退し、「平和を願う僧侶の会」が「チベット問題を考える長野の会」（代表・野池元基）と共に追悼法要を行うと、『たぁくらたぁ』発行人の野池元基さんは一躍時のひとになってしまった。

そんなわけで「ニワカ」の風にたなびく『たぁくらたぁ』リニューアル号は、予告を裏切って「チベットの祈り」が特集に躍り出ている。

そこはそれ、とれたて産地泥つきマガジンの強み！

巻頭言で野池さんは、映画「いちご白書」のラストで、自由に向かって宙にジャンプした主人公サイモンと自らを重ね、〈**自由を獲得できる保障はないけれど、生きる証としてジャンプしたい**〉と書いている。〈**『たぁくらたぁ』は、ぼくらのジャンプだ**〉と…。

Здравствуйте!

畑がついてるエコアパート
著者：山田　貴宏
定価：2000 円＋税
発行：（有）自然食通信社
TEL 03-3816-3857

2006 年 CANPAN ブログ大賞個人賞受賞ブログが本になりました！
エコアパ住民の皆さん大満足の、畑付きエコアパートができるまで。
東京下町プロジェクトの底力。

「ライフスタイルが変わるほど、快適な生活になりました。
居心地がよいので、ヘタなカフェに行くよりリラックスできます。」

「電気代はエアコンがなくなった分、大幅減です。
温度湿度、ガス電気使用量などが一目でわかると節約しようという気に自然となります。」

「畑に植えた種が芽を出して育っていくのを見守る嬉しさ！
育った物を収穫して食べる楽しさ！
まだ始めたばかりですが、畑の醍醐味を感じる日々です。」

廃墟チェルノブイリ

Book

中筋 純

人間が排除されたことにより、町を覆い尽くさんばかりに成長しているポプラの街路樹。待望のメーデー開園を前に、事故のせいで一度も子供たちに乗られることなく風雨にさらされ続けた遊園地の観覧車。時間が止まったかのように「ソビエト連邦」がフリーズされたままの建物。そして、その向こうに未だ不気味な威容を放つ発電所の石の棺桶―かの街の「失われた22年」のありのままがここにある。

廃墟チェルノブイリ
写真・文：中筋 純
発行：二見書房
定価：2300 円＋税

イラクは食べる

Book

酒井啓子

米英軍によって「解放」されたイラクでは、イスラーム勢力が政治権力を握る一方で、イラク人どうしが暴力で対立する状況が生まれた。だが、どんな苛酷な環境にあっても人びとは食べ続ける。アラブのシーア派やスンナ派社会、クルド民族、そして駐留外国軍の現在を、祖国の記憶と結びついた料理や食卓の風景とともに描く。イラク料理のレシピつき。

イラクは食べる
―革命と日常の風景
（岩波新書）
著者：酒井啓子
発行：岩波書店
定価：780 円＋税

ロシア　闇と魂の国家

Book

亀山郁夫、佐藤 優

「ドストエフスキー」から「スターリン」、「プーチン」にいたるまで、ロシアをロシアたらしめる「独裁」「大地」「闇」「魂」とは何か。新大統領・メドヴェージェフの下、ロシアはどこへ行くのか。『カラマーゾフの兄弟』の新訳でドストエフスキー・ブームを巻き起こした亀山郁夫と、外務省でロシアと深く関わった佐藤優が徹底的に議論する。

ロシア　闇と魂の国家（文春新書）
著者：亀山郁夫、佐藤 優
発行：文藝春秋
定価：750 円＋税

ひろしま

Book

石内 都

あの日の朝、一人ひとりが身につけていた、ワンピース、ブラウス、スカート、上着、肌着、ズボン、メガネ…。これらの遺品を写真家・石内都が撮影した。遺されたモノたちは鮮明に「あの日」の記憶を呼び覚ます。別冊付録・栞（しおり）には、詩人シンボルスカの「世紀の没落」、井上ひさし、柳田邦男、鷲田清一の書き下ろしエッセイを掲載。

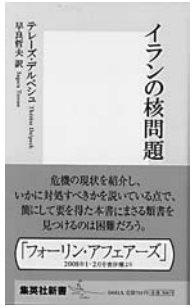
ひろしま
著者：石内 都
発行：集英社
定価：1800 円＋税

イランの核問題

Book

テレーズ・デルペシュ

著者はフランスの核問題専門家。イランのアフマディネジャド大統領が押し進める核開発の真の狙いは何か？アメリカ、ロシア、中国、パキスタン、インド、イスラエル、北朝鮮、エジプト、サウジアラビア、南アフリカ共和国、EU、および国際原子力機関（IAEA）が、これまでにどのような立場をとり、今後どのような行動を起こすべきなのかを多角的に分析。現代世界の核をめぐる地政学を一望する。



イランの核問題（集英社新書）
著者：テレーズ・デルペシュ
訳者：早良哲夫
発行：集英社
定価：700 円＋税

封印されたヒロシマ・ナガサキ

Book

高橋博子

米国が大戦終結直後から50年代半ばに行った、核戦略構築のための防護対策、原爆医学情報の収集・隠蔽などを、主に米国立公文書館所蔵の機密解除された公文書に基づいて批判的に検証・論証した米国史。米国政府が原爆投下した広島・長崎の人びとを「人体への放射線の影響」「原子兵器の効果」を調査・研究するに恰好の対象として見なしていたこと、そして核軍拡に邁進し、核抑止論を打ち立てた米国の「狂気」を雄弁に語る。

封印されたヒロシマ・ナガサキ
　米核実験と民間防衛計画
著者：高橋博子
発行：凱風社
定価：3000 円＋税

ダニエル・ヴァリエーションズ

スティーヴ・ライヒ

CD

スティーヴ・ライヒ作曲「ダニエル・ヴァリエーションズ（２００６年作）」は、２００２年にパキスタンで取材中に狂信的イスラーム原理主義者により殺害された米ウォールストリート・ジャーナル紙のユダヤ系アメリカ人記者、ダニエル・パールの遺した言葉と旧約聖書のダニエル書をテキストにしている。今年５月、ライヒの来日演奏会で日本初演された。

ダニエル・ヴァリエーションズ
作曲：スティーヴ・ライヒ
演奏：ロサンゼルス・マスター・コラール
発売：ワーナーミュージック・ジャパン
定価：2520 円（税込）

カラシニコフ自伝

エレナ・ジョリー

Book

旧共産圏の軍隊からテロリストまで、世界一有名な自動小銃「カラシニコフ」。その銃「ＡＫ-47」を開発したカラシニコフ本人の語りおろし自伝。スターリン時代、シベリアに強制移住させられた幼少期から、一兵卒から銃設計者として見いだされ、旧ソビエト最高会議代議員に上りつめるまでの波乱の人生を描く。

カラシニコフ自伝
　世界一有名な銃を創った男
　（朝日新書）
聞き書き：エレナ・ジョリー
訳者：山本知子
発行：朝日新聞出版
定価：740 円＋税

廃墟の上でダンス

ミラーナ・テルローヴァ

Book

１９９４年12月、14歳の少女は、村恒例のダンスパーティーを心待ちにしていた。しかし、そのパーティーは開かれなかった。始まったのは、戦争だった―。チェチェン紛争、廃墟と化した街で少女が〝ありのまま〟を綴った手記。

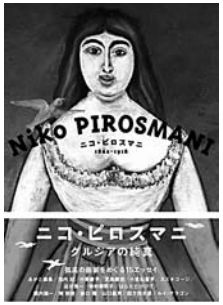
廃墟の上でダンス
～チェチェンの戦火を生き抜いた少女～
著者：ミラーナ・テルローヴァ
訳者：橘 明美
発行：ポプラ社
定価：1500 円＋税

画集「ニコ・ピロスマニ 1862-1918」

ニコ・ピロスマニ

Book

グルジアの放浪画家、ニコ・ピロスマニの日本初の画集。カラー図版１８９点を収録している。池内紀、山口昌男、小栗康平、スズキコージ、小宮山量平、四方田犬彦、あがた森魚、はらだたけひで、ルイ・アラゴンら15人のエッセイ「それぞれのピロスマニ」を掲載。主要展覧会履歴、ピロスマニ略年譜収録。



画集「ニコ・ピロスマニ 1862-1918」
発行：文遊社
定価：5800 円＋税

カナカナのかわいいロシアに出会う旅

井岡美保

Book

著者は、奈良市内で夫とカフェ「カナカナ」と雑貨店「Roro」を営む。花柄、マトリョーシカ、甘いケーキ、雫型の屋根…。ロシアの「かわいい」を探すためのガイドブック。極東のウラジオストク＆ハバロフスク、お土産市場「ベルニサージュ」が楽しいモスクワ、マトリョーシカのふるさとセルギエフ・パッサードなどを紹介。各町の詳細マップつき。

カナカナのかわいいロシアに出会う旅
著者：井岡美保
発行：産業編集センター
定価：1400 円＋税

イコン

ザ・シックスティーン

CD

ギリシャ正教とその影響を受けたロシア正教に関連する19世紀末から20世紀にかけての宗教合唱曲をまとめたＣＤ。ロシアのラフマニノフ、カリンニコフ、チェスノコフ、ストラヴィンスキー、エストニア出身のアルヴォ・ペルト、イギリスのホルスト、タヴナー、マクミランの作品を収録。

イコン
演奏：ザ・シックスティーン
発売：ユニバーサル・ミュージック
定価：3000 円（税込）

Information

日本チェルノブイリ連帯基金（ＪＣＦ）活動紹介

日本チェルノブイリ連帯基金（JCF）は 1991 年 1 月に設立されました。1986 年 4 月 26 日に起きたチェルノブイリ原子力発電所の爆発事故の放射能被災地へ、主に医療を中心として支援活動を展開しています。

支援開始当初のベラルーシは、深刻な経済状況で、白血病など病気の子ども達は、十分に治療を受けることができませんでした。衛生管理もできなかったために、多くの子ども達は感染症などで亡くなっていました。JCF は、現地の医師らと話し合いながらプロジェクトを組み、信州大学などの医療従事者と共に着実な支援活動を続けてきました。

そして 2004 年、活動の支援先はイラクへも広げられました。イラクでは湾岸戦争以後に白血病が急増しています。長期にわたった経済制裁後、新たに起きた戦争で極端に物資が不足、子ども達の治療もままならず、多くのいのちが失われています。

日本イラク医療支援ネットワーク（ＪＩＭ―ＮＥＴ）

イラクにおける小児がん（おもに白血病）医療支援のためのネットワーク。医療支援を行っている NGO や関心のある医師たちが、専門性を持ち、過不足のない支援を（イラクの人々が自分たちできちんとした治療ができるようになるまで）継続的に続けることを目指して立ち上げたネットワーク。JCF も構成団体の一員。

website　http://www.jim-net.net/

◆ＪＣＦ会費振込口座

正会員年会費（1口）	１０，０００円
賛助会員年会費（1口）	３，０００円
郵便振替口座番号	００５６０－５－４３０２０
加入者名	日本チェルノブイリ連帯基金

◆ＪＣＦ／イラク支援振込口座

血液成分分析機購入、医師招聘研修、薬品購入

郵便振替口座番号	００５２０－０－８１０７８
加入者名	ＪＣＦ／イラク支援

グランドゼロ GROUND ZERO JCF

第 76 号

発行日　2008 年 6 月 26 日
発行人　鎌田 實
発行所
日本チェルノブイリ連帯基金
イラスト題字　貝原 浩
イラスト　榧ひかり
小林裕子
表紙デザイン　酒井隆志
スタッフ　神谷さだ子
布山みな子
協力　オフィスエム
寺島仁美
ＪＩＭ―ＮＥＴ
風樹光
印刷　電算印刷

■編集後記

「たぁくらたぁ」リニューアル号はどの頁を開いても関わる方々のパワーが怒濤のようになだれてくる。「そうそう、前々からそうは思ってはいたけど…それを書いちゃっていいのかしら？」というアブナイ言及も随所に。「たぁくらたぁだから…」という編集者の声が聞こえそうだ。
ＪＣＦに関わって下さる方のパワーをグランドゼロに盛り込めているだろうか、自問することしきりです。

（布山）

販売物紹介

Book

・「チェルノブイリからの伝言」
　ＪＣＦ 編（オフィスエム）1200 円
・ユーラシア・ブックレット No.21
「ベラルーシ 大地にかかる虹
　～日本チェルノブイリ連帯基金の 10 年」
　神谷さだ子 著（東洋書店）600 円＋税

CD

・「坂田明／ひまわり」
　2500 円
・「坂田明／おむすび」
　2500 円
　JCF 理事長鎌田實が立ち上げた
　「がんばらないレーベル」第 1 弾、第 2 弾
・「小室等／ベラルーシの少女」

一澤信三郎帆布オリジナル鞄

☆綿帆布製手提げ鞄 A
（26 ×口元 36・底 30 × 6）　定価　4,500 円
☆綿帆布製手提げ鞄 B
（29 ×口元 39・底 31 × 8）　定価　5,500 円
☆綿帆布製手提げ鞄 C
（22 ×口元 39・底 27 × 12）　定価　3,500 円

映画パンフレット

・「ナージャの村」800 円
・「アレクセイと泉」800 円

本橋成一写真集

・「無限抱擁」
　（リトル・モア）3800 円
・「ナージャの村」
　（平凡社）2980 円＋税
・「アレクセイと泉」
　（小学館）3400 円＋税

●特定非営利活動法人
日本チェルノブイリ連帯基金（ＪＣＦ）
〒 390-0303
長野県松本市浅間温泉 2-12-12
TEL 0263-46-4218　FAX 0263-46-6229
E-mail　jcf@jca.apc.org
Website　http://www.jca.apc.org/jcf/